

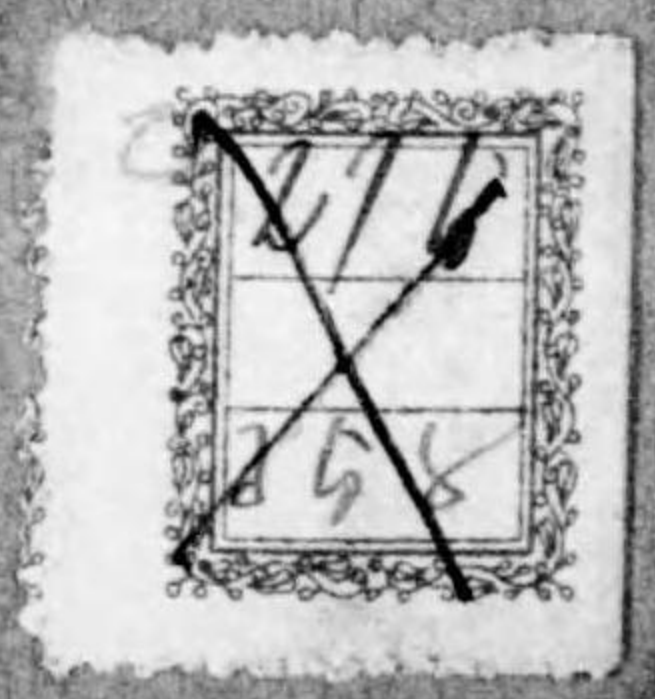
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



愛と財あゐ と たから

後新田静湾作  
編谷洗馬書



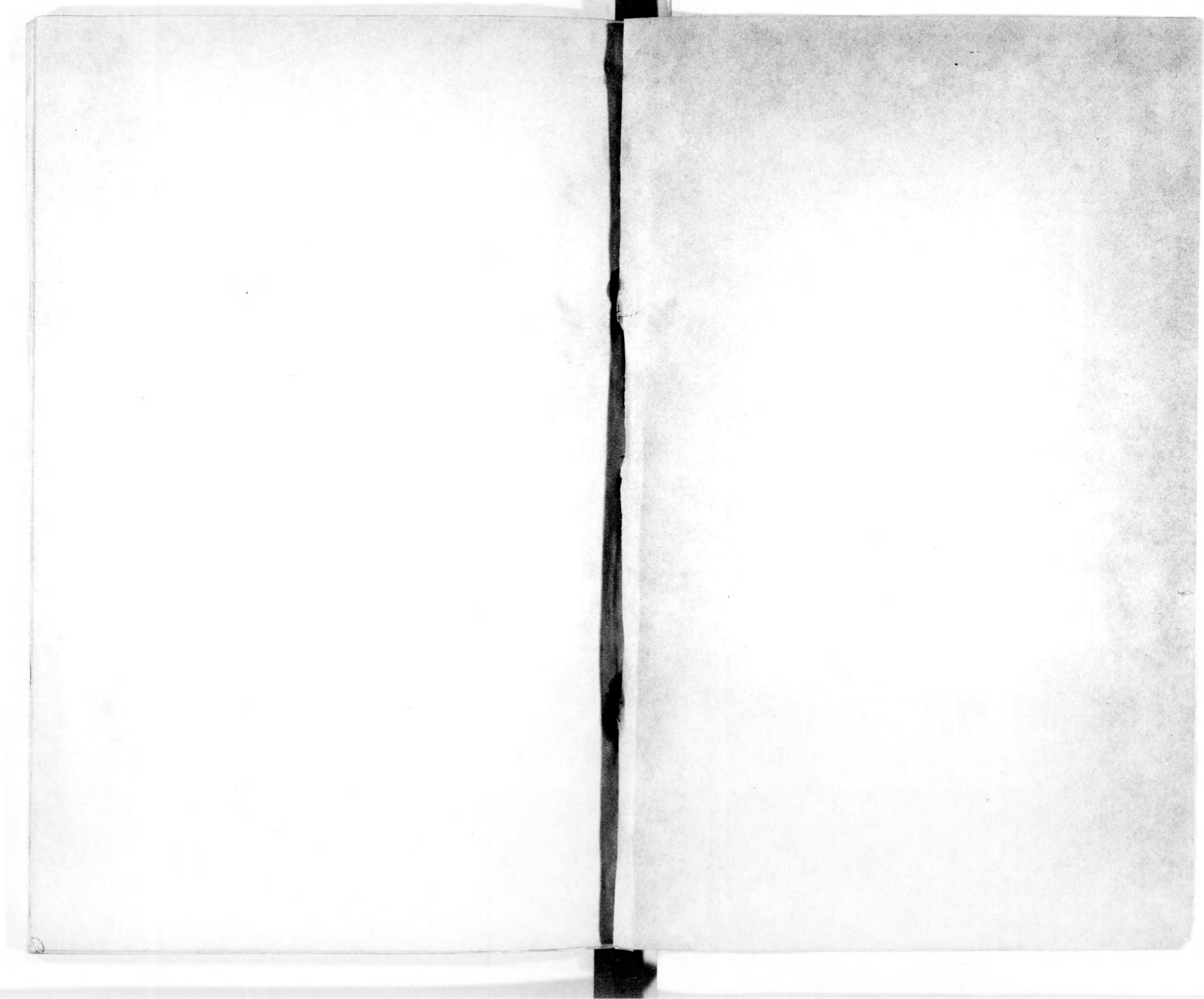


愛あ  
と  
財た  
か  
ら

後新田静湾作  
編谷洗馬畫









特105  
220

愛あいと財たから

[編後] 新田 静湾 作  
 谷 洗馬 畫

大正  
 3. 1. 10  
 内交















愛あい と 財たから (後編)

新田 静 灣

愛 と 財 後 編

(1)



恒雄は愛ぞと、お定の言葉を一言半句も聞洩らさじと、耳を傾けた。  
「あのね、美津代さんが邸を出されたのは、お姫様のピンを盗つたと云ふ事に成つて居るでせう。……處が事實は大違ひ、眞實はお霜さんとお瀧さんの狂言なのよ……」  
「何ッ、二人の所業だ」と、恒雄は驚くと共に、豫て自分の見込が過たぬに、心中一種の快感を覺わした。  
「驚いたでせう。……誰だッて愕くわねね、仕粗が巧いから」



「何んだつて、そんな殺生な事をしたんだ」

「そりやねね、早く云ふと、自分達が先に邸へ来て居るのに、美津代さんが後から来て、一寸も他に從つて居ないばかりか、初中終朋輩を輕蔑して居るやうなのが癪に障つて居る處へ、主人の覺悟が殊の外芽出度いので、それでもう我慢が仕切れなくなつたのですわ」

「成程ね。それで原因は解つたが、如何して彼の狂言を仕組んだのだらう」

「それはね、却々練りに練つたものですわ、人の居ない所で絶えず相談して、漸く出来上つたのがあれなんです」

「能く考へたね、而してアレを引出して窃と忍ばせて置いたのは誰の藝だらう」

「そりや貴郎、云はないでも大抵分るぢやありませんか、考へはお霜さんで、爲るのはお瀧さんですよ」

「其處へ持つて来て、お定さんが其の手傳か。それで無くちや然う詳しい事が分るもんぢやない。然うだらう」

「いね、如何しまして……」と、口では云つたが、餘程狼狽の色が見えた。

「……何んの、妾手傳いなんか爲ないわ。只だ最初丈けホンの相談に與つたまでの事よ」

「お鶴さんも一緒にかね」と尋ねた。

「い、ね、彼人は初め居なかつたから成可く少い人で行つた方が分らないで、宜いと云つて少しも知らさなかつたんだわ。……妾も後には一切他言せんと云ふ約束で、手を引いて居たのよ」と有繋の良心に耻ぢてか、同じ意味の事を繰返した。

恒雄は安心させる爲め、故らに、

「ぢやアお定さんは罪の軽い方だ」と云ふ。

「然うですとも。……それから妾が美津代さんはもう駄目だと云ふのは、其の後惡漢に引罹つて、多分今頃は何處かの女郎屋へ叩き賣られて居るでせう」

と知つたか振の事を云ふ。美津代は現に氷川町に居るではないかと、恒雄は可笑かつたが、飽迄知らぬ顔。

「然うかね。其の相手は誰？」と驚いた体を装ふ。

「それ、貴郎は御承知ないかも知れんが、彼の篠路組に居た染五郎と云ふ轆子よ」

は、アと思つたが、其の心を色にも顯はさず、

「染五郎と云ふのは、彼の夜中邸内へ忍込で、出入を差止られた男ぢやないか」



「然うです。……彼の男はね、お瀧さんの情夫よ。未だ誰にも知れて居ないが彼の晩もお瀧さんと密會する意りで忍込んだのを、ボチが見付けて吠出したもんだから、それで捕まつたのよ」と問はぬ事まで圖に乗つて喋舌つた。

「然う、それから」と後の話を促がす。

「彼の染五郎はね非常な女蕩しで、始終女を食つて歩いて居る處から、お瀧さんと共謀になつて、美津代さんを邸から追出す、それを俘にして賣つた金を山分にする相談ださうなが、何うせ男が奪つて了ふでせうよ。彼の通り染は男振は好いし、口前が巧いから一寸女が引罹りますよ。屹度美津代さんも嘗められて了つて、何うせ彼の男の食物となるでせうよ。だから貴郎も未練を残さないで、奇麗サツパリと、男らしく美津代さんの事を思切つてお了ひなさい」と云ふ事よ」と滔々と述立てた。

これに依つて恒雄が期待して居た事は全然明白となつて來たのだ。

(11)

それとは知らぬ美津代は、何日まで着せられた濡衣の乾かぬを心配して、仲人を通じて琴似に事實の取調方を迫ると共に恒雄にも援けを乞ひ、更に一方には隅江の考へで、嚮に懇意になつた署長山根親信に事情を告げ、個人的援助を求むるなど、種々の手段を執つて居た。處が、或日隅江が學校から歸つて來て、

「松岡さん、吉報よ」と云ふ。

「吉報とはどんな事」と尋ねる。

「六本木の小野からね、一寸貴女に來て貰ひたいと云つて來たから、明日にでもお出でになるやうにどの事なのよ」

「はッ、彼の小野さんが……ちや稍く潔白な事が分つたのでせう」

「屹度然うだらうつて、西野さんも云つてましたよ」

「それなら嬉しいわね」

「貴女を呼ぶ以上は、必らず然うでせうよ。妾も然う思ふわ」と附加へた。

「ちや明日の朝行きませうよ」

「然うなさいな」



其の夜の美津代は、近頃(ちかごろ)に無い安らかな眠(ねむり)を食(た)べる事が出来た。

夜(よ)が明けると、美津代は例(れい)日(ひ)よりは早く起(おき)て、それ(それ)く身(み)仕度(たく)を済(す)まし、食(しょく)事を了(を)へて直(す)ぐさま六本木(ほんぎ)へと出向(でむ)ひた。

勝手(かたて)知(し)つた岸子(きしこ)の宅(たく)に訪(ま)づれると、これも知(し)つた顔(かほ)の女(をんな)が出て來(き)て、

「これはお珍(めづ)らしい、昨日(きのう)にもお來(き)でになるか知(し)れんと云(い)つて待(まち)つて居(ゐ)ました何(なに)うぞ此(こ)方(ち)へ」と豫(かね)て言(い)付けられて居(ゐ)たと見(み)え、直(た)ちに應接室(おうせつしつ)へ通(とほ)した待(まち)つ間程(まはら)無く出(で)て來(き)たのは琴似(ことね)で、何(なに)んどなく極(きま)りの悪(わる)さうな態(ふり)。

「お、相變(あひかは)らずお達者(たつしや)で結構(けつこう)です、日外(いつが)はねね飛(と)んだ氣(き)の毒(どく)な事(こと)をして……氣(き)の毒(どく)とは思(おも)つて居(ゐ)てもこれも勤(つと)め一ツ(ひと)だから仕方(しかた)が無(な)しね、何(なに)うか悪(わる)からず思(おも)つて下(くだ)さいよ」との言(い)譯(わけ)である。

「わ、何(なに)んの、貴女(あなた)のお心(こころ)は能(ぞん)く存(ぞん)じて居(ゐ)ります」と簡單(かんたん)に云(い)ふ。

「時に、目下(いま)何所(どこ)かへ行(い)つて居(ゐ)るの」

「いね、何處(どこ)へも參(ま)つて居(ゐ)ません。未(ま)だお邸(やしき)の事(こと)が方(かた)も付(つ)きませんので」

「成程(なるほど)、實(じつ)はね、其(その)後(ご)いろくくと手(て)を盡(つ)くして調(しら)べて見(み)たところが、悪(わる)者は飛(と)んだ所(ところ)にあつて、全(ま)く美津(みつ)さんには暗(くら)い所(ところ)の無(な)い事(こと)が分(わ)つたので、本(ほん)人(じん)に大層(たいそう)氣(き)の毒(どく)な事(こと)をしたから、歸(かへ)れ

るものなら今(いま)一度(いちど)邸(やしき)へ歸(かへ)つて來(き)るようにと殿様(とんさま)はじめ奥方(おくがた)の仰(おほ)せに、妾(めかけ)も素(もと)より其(その)意(い)なので其(その)相談(さうだん)が仕(し)ない爲(ため)態(たい)々(ざ)來(き)て貰(もら)つたのだが、何(なに)うでせう、また邸(やしき)へ來(き)て呉(く)れる氣(き)は無(な)いだらうか、此(こ)方(ち)方(ち)にも一旦(いちたん)あんな事(こと)が有(あ)つたものだから、氣(き)不(ふ)昧(まい)なつて嫌(いや)かも知(し)れんが……」と上眼(うげん)に顔(かほ)を見(み)た、美津代(みつよ)は徐(おそ)ろに口(くち)を開(ひら)いて、

「元來(もとより)双方(さうほう)の孰(い)れか嫌(いや)になつて下(くだ)つたのでは無(な)し不(ふ)時(じ)の出來(き)事(こと)に依(よ)つて斯(か)うなつたものですから一切(いっさい)の事情(じじやう)が判(わか)明(めい)つて元(もと)の通(とほ)りに使(つか)はふと仰(おほ)有(あ)るなら、妾(めかけ)も再(また)び上(あ)りませう。……就(つ)いては冤罪(えんざい)と云(い)ふ事(こと)が分(わ)つて妾(めかけ)の身(み)が潔白(けつぱく)なものとなつた以上(いげん)然(ぜん)う穿鑿(せんさく)して聞(き)く必要(ひつやう)は無(な)いやうなもの、妾(めかけ)に取(と)つては將來(せうらい)の參(ま)考(かう)ともなひますし、また保証人(ほしょうにん)達(たち)にも斯(か)う々(ざ)其(その)顛末(てんまつ)を聞(き)かしたならば初(は)めて安(あん)心(しん)をしますから御面倒(ごめんどう)でも一應(いちやう)其(その)次第(しだい)をお聽(き)かせ下(くだ)さいまし」と其(その)説明(せつめい)を求(もと)めた。

「成程(なるほど)それは有(あ)理(り)な事(こと)です」との冒頭(まへご)して琴似(ことね)は小間使(こまつかひ)の暗闘(あんたう)からお霜(しも)お瀧(たき)の兩(りやう)人(にん)が斯(か)る狂(けい)言(げん)をかいて美津代(みつよ)を陥(おとし)れた事(こと)が露顯(ろけん)して既(すで)に右(みぎ)兩(りやう)人(にん)を解雇(かいこ)し尙(な)ほお定(さだ)も其(その)相談(さうだん)に與(あ)りながらそれを秘(ひ)して居(ゐ)つたのでこれ(これ)も不(ふ)都合(ごふ)とついでにクビになつた事(こと)を語(かた)つた併(しか)これが露顯(ろけん)の功(こう)が恒雄(とねお)にある事(こと)は少(す)しも云(い)はなかつた。



( 三 )

琴似は尙ほも語を繼いで、

『そんな次第で、後に残つて居るものはお鶴さん一人ですから、今貴女が戻つたどて誰にも氣兼ねる者は有りません……斯う話が極れば、邸でも今新規に來たのもあり、また明日に來る筈のもあるけれど、孰れも馴れない者ばかりで困るから、成可く早く歸つて貰ひたいものです併し、貴女の方にも種々の都合も有らうと思ふが、何日歸つて呉れますの』と尋ねる、美津代は豫ての希望は此の時と考へた。

『それに就いて妾はお願ひが御在ます』と切出した。

『わッ、願ひとは……』

『他ではないですが、妾は表向の殿様附にして頂きたいので御在ます』

『ほう、樂な姫様附を嫌つて、忙しない殿様附を望むとは、そりや何か姫様の方に不満足な事でも……』と云はうとするを皆まで云はさす。

『いね、左様な事は御在ません、姫様の方へ參れば躰も安逸だし、また馴れても居ますから、結局其方が宜いのですけれど、少し思ふ事が有りました、それでお表の方を望みますので』  
『ぢやア何んだね、また姫様附となつたなら、再びあんな事が起りはすまいかと其の心配からでは有りませんか』

『いね、それでも無いのです、只だ少し心に願ふ事が有りました、御在います』と訊いて呉れれば其の理由を話さうと待設けて居た。若しこれが初めてならば無論尋ねも仕やうが、既に其の爲人を知つて居る琴似は、別に糺しもせず、

『そんな希望が有るのなら、奥方とも相談して、成可く願ひを副へる事にしませう。……先づ邸へ歸つて來て、其の事は後にしたッて宜いちや無いか』と云はれて美津代も異議は無い。只だ此の事を容れて貰へば宜いと、深くも云はぬ。

『何うか然う願ひます。……ぢやア明日歸る事に致しませう』と確と答へた。

『お、明日歸つて呉れますか。それでは待つて居ますよ』と茲に堅い約束して、美津代は先づ其處を去つた。

歸途、美津代は山根署長を訪づれて、漸く自分の嫌疑が晴れ、悪者どもは既に夫れく處分



されて、自分は再び豊平家に住込む旨を語ると、

「然うか、解決を告げたのですか。それは結構ちやツた……先達てお話が有つてから、乃公が部下の刑事に旨く含めて、取敢へず豊平邸へ遣りましたちや。處が家令が出て来て云ふには、其の事なら既に紛失品も発見された今日、邸内から細付の罪人を出すのを好まん、成可く事を穩便に済まさうと思ふて、只今其の運び中ちやで、微罪の事でもあり、何うぞ寛大に見て遣アさいと懇請したので、それちやア折角出張したけれど、貴公の言葉に依つて一先づ歸りませう、併し、時日が経つても尙だ其の儘であるならば、其の時には或は臨機の處置を執らんにも限らんチウてな暗に威壓を加へて置きましたちやテ。まア早く解決して宜かつたよ」と云ふ。

「然うでしたか、これも貴官方の御盡方に依つて、早く方が付いたので御在ます」と感謝の意を表した。

「お、それから此間貴女を脅迫しやうとした男が有りましたな。あれも二三日前に檢舉されましたよ。それでまア可恐者が失くなつて一寸安心ちや」

「わッ、彼の悪漢を押へて下さつたのですかこれは何うも有難う。双方とも一時に敵討が出来てこんな愉快な事は有りません」と喜んだ。

美津代は宿に歸つて隅江の戻るを待ち、今日の顛末を殘らず話すと、小川も共に欣んで、猶ほいろ／＼と勵ました。

(四)

美津代は翌日の朝、仲人の西野方を訪づれ、同じく其の顛末を話して、尙ほ種々と斡旋の勞を謝した。

「それでもね、早く分つて宜ございましたよ。半歳も一年も経つて、尙だ分らないやうでは寔に困りますか……」と主婦の言葉。

「これと申しますのも、全く貴女方の御心配下さつたからで御在ます。而して再びお邸へ歸れるやうになつたのは妾ごんなに嬉しいか分りません」

尙ほ二言三言話した上、主婦出勤の都合もあれば、美津代は、

「それではこれより邸へ参りますから早速ですが失禮致します。孰れ改めてお禮に伺ひます」と辭せんとする。



「あ、然うで御在ますか。では切角大事にお勤めなさいまし。チトお暇な節にはお遊びに入つしやいな」と柔和しい西野方を去つて大通りに出で、程なく六本木に來た。

例の岸子の宅に到ると、留主居の女が、

「もうズットお邸の方へお出でなさいましよ。お待受けになつて居ますから」と云ふ。

「然うね、初めてぢや無いから、然うしても宜いわ」

「わゝ、然うですども」

「ぢや然うしませうよ」と美津代は案内知つた邸内を、中口から上つて女中部屋に行くと、恰度琴似が其處に居て、新參の小間使に何やら言聞かせて居る處であつた。

「昨日は失禮致しました。何うか宜しく願ひます」と挨拶する。

「お、お來でか、早かつたね」と琴似は云つて、更に其處に居た新參の女に美津代を紹介して、

「此の人が前から居る人で、病氣の爲め暫く宿下りをして居たが、今度治つて歸つて來たのだから、妾の居ない時には万事此の人に訊いて爲さいよ」と言添へた。間も無く其の女は起つて行く、跡には只だ二人。

「お上は御在宅で居らっしゃいますか」と尋ねた。

「あ、御夫妻もお宅です」

「一寸御挨拶を申し上げ度いのですが、御都合は如何でせう」

「少しお待ちなさい、只今お客様で、御夫婦共に應接室にお出居しだから」

「では何か御用を……」

「まア一服しなさい。程なくお客も歸られませうよ」

仕方が無いから暫く其處に座つて居ると、

「美津代さん、宿に居る間何處かへ遊びに行きましたか」と訊く。

「いね、却々それどころぢや有りませんでした。一日も速く疑ひの晴れるやうにと、只だそればかり心配しまして」と答る。

其處へまた、異つた新顔の女が入つて來た、琴似が客の事を訊くと、今歸つたと云ふ。更に此の女にも美津代を紹介して、前と同じやうな事を云つた。

「それでは美津代さん……」と促して琴似が先に立つ、美津代も起つてつゞくと、先づ伺ふのが奥方の許。



國子夫人は其の顔を見るより、

「お、美津代、よく歸つて呉れましたのね、お前には大層氣の毒な事をして……何うか勘辨してお呉れ……」

「何う仕りました、奥方から左様なお言葉を頂いては寔に恐入ります。

またお慈悲に甘へてお邸へ歸りまして御在ますから何うぞ宜しくお使い遊ばしますやうお願ひ申します」

「お前が戻つて呉れたで、妾も安心します、お世話だらうがまた面倒を見て遣つてお呉れ」の仰せである。これではまた何うやら令嬢附のやうなで、

「あの……」と云ひながら、美津代は傍に居る琴似の顔に目を注いだ。

## (五)

美津代の此の眼には督促の意が籠つて居る。それと悟つた琴似は、此の場合黙つては居られない。

「上様、係りの事に就きまして、美津には望みが御在ますのですよ」

「わゝ、係りに望みが有ると云やるのかね如何いふ望みが……」

「はい、彼の、殿様附にして頂きたいと申しまして」

「わッ、では表向を望むのかね」

「然様に御在ます。何うか成る事なら其やうにお願ひ致したう御在ます」と美津代は云つた。

「それでは姫の方はもう飽いたのだね」と俄かに不快の面持である。

「勿体ない何で姫様が嫌になりませう、然様な事では御在ませんが、少し心願の筋が有つて、

それでお願ひ致すので御在ます」

「其の心願とは？」と琴似が口を挿んだ。美津代はこれに答へやうと爲ると、奥方が早くも、

「心願とあれば仕方が無い。それをも強つてとは申しませんが、姫が却々承知しますまいからではお鶴と一月交代にする事にしませう」と如才ない。

「然うお願ひが出来ますれば寔に幸福に存します」

「それでは美津代さん其の意で……先に貴女が行つた後には、お鶴さんがお附となつて居るから、當月は其の儘にして、來月美津さんが代るやうに……それから表向を勤るとあらば、尙ほ



の事、此處を失禮して殿様へ御挨拶に上りませう」と琴似が促がした、二人は奥の間を辭して子爵の居らるゝ書齋に伺つた。

琴似は二言三言他の用件を話した後、

「殿様、美津代が歸りまして御在ます」と振返る。

「おゝ、然うか」と子爵も美津代の方を見て、

「美津、お前には氣の毒ぢやつたな。能く歸つて呉れた。また頼むぞよ、お前が居らんと云うて、姫が憤かつて居つたがの、戻つたら悦ぶぢやらうよ」と御機嫌斜ならぬ。

「殿様、美津は今日から表勤めを致しまする」

「はッ、美津が表を……それぢや姫が承知すまいての」と聞答めた。

「はい、それで鶴と一ヶ月交代にする事に只今奥方の仰せで御在ます」

「む、一ヶ月交代に……何んぢやとて奥が其のやうに致したのぢや」

「それには美津の願が御在まして本人は殿様のお附を懇望致しまして御在ますがそれでは姫様のお肯入が無らうからとて、それで奥方が然様なお取計ひ遊ばしましたので御在ます」

「はッはッ。美津も却々物好だの、若い者同士が宜かりさうなものぢやに、乃公のやうな年寄

の側を好むとは……併し、結構ぢや……。お前のやうな念の届いた者が附いて居つて呉れるのは。のふ琴似、然うぢやないか」

「仰せの通りに御在まする」

「ぢやが却々忙しないぞよ。時に依ると幾人も込合ふ事があるからの」と云はれる今迄出端を失つて居た美津代はやうやくの事に、

「幾許忙しなうても、其のやうな事は少しも構ひません。何うかお使い下さいますやう、幾重にもお願ひ致しますと云ふ。

「むゝ、他の者が皆新規ぢやからの、お前が教へるやうにして……當分は余計に骨が折れるぞ」

琴似は美津代を残し置いて御前を下つた。

(六)

よし隔月なりとは云へ美津代は表向を勤むる事となつたので日頃の目的の一部が達せられ、



これに依つて最後の大目的に一步近づいたかと思ふと心中自づから愉快に堪へない次ぎには北海道よりのお客が有つて欲しい而して自分の父母の事を知つて居る人に早く逢ひたいものだと只管にそれを念じて居た。

處が其の日は一人の來客も無い極めて閑散な事だ、こんな日は滅多にあるもので無い、すると子爵が、

「美津今日は暇ぢや姫が歸つたやうぢやからの、お前一遍行つて遣れい定めし歡ぶぢやらうから」と云はれる。成程、先程から令嬢の燥いだ聲が聞えて今學校から歸られたなどは美津代の私かに思つて居た處であつた其處へ主人より此の言葉なので飛立つやうな思ひに驅られ、

「では殿様、お言葉に甘へまして、一寸姫様の許へ御挨拶に行つて参ります」と其の間を新參の朋輩に頼み置いて、廊下傳ひに姫の居室へと心ざした。

聽て曲角の所まで行くと、向ふからお鶴がやつて來て、

「おや珍しい、貴女がお歸りの事は琴似さんから話があつたが、眞逆今日とは思はなかつたわ」と莞爾した。

「歸つたからまた宜しく願ひますよ、何うか仲善くねね……」と立停つて話して居るのを、遙

かに認めた令嬢桃代が、障子の際から聲を上げて、

「美津、美津てば……」と手招きする。それと見た美津代は、直ぐさま腰を屈めて叩頭した。

令嬢はそんな事は如何でも宜い、早く逢ひたいのだ。

「早くお來でよ」との督促に、二人は話も匆々にして別れた。

美津代は久し振に令嬢の顔を見て欣び、桃代もまた嬉しさに莞爾々々して迎へた。

「姫様、御機嫌よく居らせられてお茅出度う御在ます」

「お前も壯健で、結構だね」

「美津はまた歸りましたから、何うぞ宜しう願ひます」

「然うだつてね。昨夜お母様から聞いて妾喜んだわ……お前が行つてから妾淋しくて困つたのよ」

「然様で御在ましたか……」

「美津、お前の行つたのはヒンのことだつてね……それなら然うと何故云はなかつたの。あれ程妾が訊いたぢや無いか。それを黙つて行つて了つたもんだから、妾昨日まで何事も知らずに居たが、初めてお鶴から聞いて驚いたのよ……お前が初め然うと云つてさへくれたなら、妾



が證人になつて、決してあんな目には遇はせなかつたのに、餘りお前が黙つて居たもんだから遂ひ今度のやうな事になつたのだ、これから先ごんな事が有つても、一切隠さずに妾に云つてお呉れ、然うすりやあんな間違は爲せんから」年齒は行かぬが、情の籠つた此の言葉に、美津代は感激して、

「お姫様、有難う御在ります。今にはじめぬ貴女様のお情け、身に泌みて美津は一生涯忘れませぬ、妾の足らぬ爲めに姫様にまでも御心配を懸けまして、何んとお詫を致して宜いのやら、只だ忝なさに涙が溢れます。……これから美津は一月隔にお側へ上りますから、宜しう願ひ申します」と眼を潤まして云ふ。

「わッ、一月隔とは……」と姫は聞答めて、次いで語を繼ぎ、

「……そりや美津、如何した事なの」と急に氣色ばんだ。

(七)

自分附となるのを當然と心得て居た桃代は、思ひも掛けぬ此の言葉に尠からず驚いた。それ

と同時に何故そんな事になつたのか、と御機嫌頗る斜めである。美津代は成程昨夜初めて聞かれた丈の事だから、此の事を御承知無いのも道理だと思ひ、

「それは妾からお願ひ申したので御在ります」

「何故。……ではお前、もう妾が嫌になつたのかね」とますます不機嫌だ。

「いね、然様な事では御在ませぬ。少し心に思ふ仔細が有りまして、それで一月を殿様附に願ひましたので、決して姫様を嫌ふの何んのと云ふ事は御在りませんから、何うか然様思召して下さいまし」

「では何んなの、其の理由を云つて聞かせな」

「其の理由を申しますと大分長くなりますから、追つてお話する事にして、只今は申上げませぬが、美津代の身に關して深い事情の有る事で御在ります。シテ其の事情と申しますのは、今朝一夕に起つた事では無くて、妾の生れ落ちるから附纏ふて居る事で御在りますの」

「嘘だ、お前は妾を誑して逃げる意りに違ひない」

「いね、如何致しまして、決して然様なことは御在りませぬ」

「では、長くなつても構はぬから、今茲で話して見な」



「でも殿様から、少しの御猶豫を頂いて参つたのですから、然う沈着いては居られませぬ。何れ機を見て寛緩とお話申しませうよ」

「それでは鶴を表へ遣つて、お父様からもつと暇を貰ふやうにします。其の意りで話してお呉れよ」

美津代は實際困つた。これも姫が自分を思ふからの事と思ふと、滿更無下に斥ける譯にも行かない、と云つて姫の頼みを聞いたなら、殿様の方に濟まぬ、幾許愛嬢の願ひとは云へ、自分の爲めに多くの時間を借さるゝのは、殿の快く思はるゝ所ではあるまいと考へたので、

「未だ相棒が新米ですから、お客様が有つたら直ぐに困りますで御在ます。其の理由は後日でお話致しても宜いちや有りませんか。美津が姫様に仕へます心は、往日と少しも違ひは致しませぬ、いや先の日お姫様の御親切に接して、却つて厚くなつたので御在ます。若し姫様の仰せの通り、妾が嫌になつたのなら、美津は再びお邸へ歸りは致しません。これに依つても決して妾が、お姫様を嫌ふの厭がるのと云ふ事の無いと云ふ事を、お察し下さいまし」

「それも然うだね」と桃代はやうやく得心したらしく、其の怒つた顔面は次第々々に舊に復して来る。

其處へまた、美津代は他へ氣を轉じさすのが良いと心付いたので、早速床に生けてある花を提へて、

「姫様、お花が大層お上手に挿かつて居ります。相變らず師匠が参りますで御在ますか」と尋ねた。

「嫌よ、上手に挿かつて居るなんて。」

未だ駄目ねね、師匠は一週間に二度宛來ますが、何んだか漸々と至難くなつて來て一寸も思ふやうに挿からんのなもの」

「それは何事でも然うで御在ます。初めは易いやうで少し解つて來ると至難いものですが、それをまた押して行つて居ますと、今度は本當に易くなつて参ります、然うすりや最う手に入つたもので御在ますわ」

「然うねね。其處までの辛抱が肝腎だね、然う思つて我慢して行つて居るけど、お前と違つて鶴は挿花も茶も知らないから一寸もお稽古の助けにならないのなもの、妾しや此の節進歩が遅いのよ」

「いづく、そんな事は御在ません、美津がお相手致した時より、餘程御上達遊ばしましたわ」



姫はそれを耳にも懸けず、

「妾や何をしても張合が無いから、美津早く妾の方へ来てお呉れよ。何日から来るの」と訊く。

「はい、來月は參ります」

「來月……」と急にガツクリした。

## (八)

今日のお客は北海道の人で、札幌製麻會社の重役とかで、豊平家に於いても鄭重の款待である。

主人と客とは暫く談話をついで居られたが、應て要談が終つたので、其の席に於いてお酒が出た、此の間に立つて種々の斡旋をするものは、美津代と新規に來た房江の二人なのだ。

「閣下、近來メチールとか云つて、世上で大分喧しい問題となつて居りますが、下等の泡盛ブランドンデーばかりと思つて居りや、清酒にも混合つて居るさうで御座りますな。事實とすりや酒

も迂濶には飲めん事ツて……」と云ひながら、猪口を啣む。

「さ、何うやら然うのやうぢやが、そりや立花さん些な事ツちや有るまいか、殊に貴公の所でも矢張灘から直接に取つて居なさるんだらう。乃公の宅も同様ぢや。お互ひに信用のある店から取るのでそんな心配は無い、安心して飲まれい」と盃を献した。

「否や、お邸や宅で頂くのは吟味してあるから大丈夫で御座りますが、普通の賣店で嚙くのは油断がなりません」とグツと飲干す。

「賣る方でも、それを自身に知らんぢやから困るわの」と受けながら云ふ。

「然様、皆一部奸商の爲る事で御座りますから、それを買つて賣る者も意外なのが大分有るやうで……」

「む、已れ一個の懷ろを肥やさん爲めに、社會に害毒を流すんぢやから、惡むべき奴ぢやの。そんな奴は片ツ端からドシ／＼處分するが宜い」

「然様で御座ります」と二人共口には酒の害を説きながら、其の口へガブ／＼と其の毒を注いで行く。

「時に立花さん、ビールは如何ぢやな生の冷ッこいのを飲られんか、札幌は貴公の方が本場ぢ



「やから、此方は惠美須を以て對抗しやう。はッはッはッ」と聲高に笑ふ。

「孰方にしても、私は到底閣下の敵ぢや御在ません」と眞面目になつて云ふ。

「酒には敵はんぢやらうが、貴公は乃公より十年も若いから、一方の方に掛けたら剛の者ぢやらうな。はッはッはッ」

「如何仕りまして、閣下こそこんな美しいのを座右に置かれて日夜御賞美なされるのは罪が深う御在ますぞ」

「否や、其の方に掛けては乃公は柳下惠ぢや。貴公のやうな通人ぢや無いよ」

「何うだか、其の邊の事は保証出来ませんが併し閣下、本統に美しいのをお置きになりましたな」と客は側に居る美津代の顔をツク／＼と眺めて、其の美しさに恍惚とする。

「ほう、大層御意に叶つたと見ゆるな。北海道には色白の美人が多いけれど、此の美津代のやうな、何點も揃ふたのは滅多に無いのう」と子爵は得意である。

「アラ、嫌で御在ますわ。殿様、然様な事を仰有られては……」と美津代は眞赤な顔をした。

「は、美津代と申しますか。名は躰を顯はすで、名實相伴ふ美人で御在ますな。寫眞でも有らば、土産に一枚貰つて行つて、閣下の誇りに郷國の者に見せたいものです」と垂涎三十丈の

体だ。

美津代は此の人が、自分の両親の居る北海道の人と思ふと、未だ初めてはあがあるが、何んと無く懐しく思はれ、機會あらば尋ねて見やうと考へ、殊に身分ある人の事だから、少しも疏略にせず、赤誠を以て款待して居たが、客が餘りに自分を賞するところから、少し氣味悪く感じて來た。

(九)

子爵が九州地方へ旅行された跡には、來訪者も自然と絶わて、豊平家の表向は頗る閑散となつた。

乃で、美津代房江の兩人は、其の餘暇を以て、奥と離座敷との双方を手傳ふ事になつたのである。

今日も美津代は令嬢を送出した後、奥に行つて何角と手傳ひをして居ると、園子夫人がそれを見て、



「美津や、そんなに精を出さないで、まア一服しなさい」と勢はる。

「はい、有難う御在ます。上様、一服點てませうか」と云ふ。

「それは好い所へ氣が付いた。幸ひ風爐も煮沸つて居るから、お手前を頼みませう」との御所望。

「畏りました」と直ちに點茶の準備に取掛る。

「お菓子も昨日岡野から持つて来て未だ手の附けて無いのが有るから彼品を出しなさい」

「はい」と地袋から折を取出し、蓋を取つて其の一部を菓子鉢に移した。

其處へ、これも新規の小間使藤野が入つて来た。

「お、藤野、琴似に然う云つて呉りやれ、お茶が點つから来るやうにと……そしてお前も來なさいよ」

「はい、有難う存じます。妾は不調法で御在ますからと辭退しながら、其の命を傳へに立つた。

美津代が匙を手にして、栗の蓋を開けた處へ琴似は入つて来た。

「只今は有難う御在ます、仰せに従ひましてお相伴に上りました」と云ひながら座に着いた。

「昨日來た新葉に、美津の手前で一服も好いと思つて……」との御意である。

「然様で御在ます、此の節は日が長う御在ますから、午後の一度では何んだか物淋しう覺わます」

「然うです、これから暫くの間は、午前にも一度點てる事に爲るかの」

「それが宜しう御在ます」

議は立ろに用ゐられて、これがお邸の定例となつた。

内輪同士の事とて、難しい禮義作法などは抜きにして、先づ奥方から始まつた、それでも美

津代は心配して、

「お服加減は如何で御在ます」と訊く。

「寔に結構」と満足して居られる。それに引替へ、次に琴似の番になると、同女は、

「妾は少し大服に願ひますよ」と注文する。これは日頃忙しい中でお相伴しつけて居るので、

他が二服喫るところを、自分は何時も一服で済ますより、自然と其の習慣が付いて、これで無

くては飲んだ氣がしないとは琴似自身の云ふところだ。

それを心得た美津代は、満々と點て、侷めた。



茶が済むと、琴似は世間話に移つて、暫くはお相手をして居たが、聽て其の場を引下つた。跡には主従二人の外誰も居らぬ。

「美津……」と何か有りげな呼びやうに、

「はい、御用で御在ますか」と尋ねた。

「何日かお前に尋ねやうとは思つて居ても好い機が無うて遂ひ其の儘で居たが、日外云やつた心願とは、そりや如何した事なの……。他に明かせない事なら強てとは云はんが、差問の無い事なら話して聞かせなさい」と迫つた。

## ( 十 )

訊かれないまでも、機會が有つたら此方から話さうと思つて居た美津代は、奥方の此の尋ねに充分答へて、而して搜索上の助けを乞ひたいものと、

「實は其の事を申し上げたいと豫く思ふて居まして御在ますが、自分一身上の事を、妾から申

出るのも烏計がましいと存じまして、それ故これ程控へて居りましたので御座ます……」と云ふを冒頭に、父母の事から説起し、自分の生立、また日頃の志望を述べ、其の父母に逢ひたさに、態々當家を選で、奉公に上つた由を云ひ、

「然う云ふ事情が御座ますので、それで我儘にも殿様附をお願い申した次第で御在ます」と詳細に述立たのであつた。始終を聴かれた國子夫人は、餘程感に撲られた様子で、

「お前が姫路の舊家老の家の生れである事は、日外誰かの話に聞いて、成程と思つた事はあるが、そんな事情の潜んで居る事は夢にも妾は知らなんだ。それではお前が邸への奉行は、一方から云ふと孝行ゆゑとも云へるわのう。……何んにしろ、そんな事情が有るのなら機を見て妾から御前に申上げて、一日も早く判明るやうにして進ませせう。……而して、北海道は何處に居られたと云ふ、其古い事でも分つて居るとか又は何業と云ふ事でも知て居ると宜が、それをお前は聞て居ないのかね」と訊かれる。

「それが少しでも分つて居ると宜いので御在ますが、何分にも只今申上げました通り單だ北海道と云ふ丈で、全然雲を掴むやうな捜しもので御在ますので、全く困つて居ますので御在ます」とさも遺瀨無さうに云ふ。



「然うだよ、北海道と云つても却々広いから、只だそればかりでは分らないがでも邸へは北海道から種々な人が来るから、其の中には知つた人が有るかも知れないよ……御前へは妾から然う申上げて置くから、お前も嘸ぞ疎漏は有るまいが、出入の人に氣を付けて、これぞ思ふ人には尋ねて見なさい。然うしたら分らないとも限らんよ」

「然様で御在ます妾も其の意りで決して油断は致ませんが何うか殿様へ上様からお願ひ下さいますやう、宜しくお願ひ申します」と惘願に及んだ。

「あ、お願ひ申して置くから、其の意りでお居ですよ」と有繋に令夫人は思遣が深い。

暫く二人は無言で居たが、此の間の双方の頭には所在不明のは義勝夫妻を中心に、種々な事が相往來して、其の想像は宛然活動寫眞を見るやうであつた。

「でも、美津が是程までに思つて居るのに、若しや現世に居られんなら……と思ふが、併しそんな事はあるまいけど。……心配するに際限が無いのう」

と不祥の言のやうだが、これも夫人の思遣が深きに過ぎるからだとは、日頃の氣質を知つて居る美津代の考へである。

「それなら仕方がありません、斷念めるまでの事で御在ますが、夫にしても妾は一遍彼方へ行

つて、其歿なつた跡が弔ひたう御在ますの」とホロリとした。

それを見られた奥方は、事實然うと極つた譯でも無いのに、自分の思過ごしからして、餘計な心配を當人にさしたのには妾が悪かつたと心付かれ、

「おう、縁起でも無い事を云つて、餘計な心配をさせたのは濟まなんだ、決してお前を泣かさうとて云つた言で無から、悪くは思つて呉るなよ」と詫る。

「いわそれは勿躰無う御在ます。上様のお意は、美津が能う存じて居ります」と今度は感涙に咽んだ。

## ( 十一 )

美津代は邸へ歸つてから、時々邸内に於いて恒雄と顔を合はせ、また言葉を交へる事もあるが、それは單に通り一遍の事で、打解けて爲るやうな暇は無ければ、先に自分より頼んだ事もあり、且つ頼まなくまでに既に心配して呉れて居る事が分つて居るので、一度寛緩として謝辭を述べたいものだと思ひながら、未だ其の機が無くて過ごして來た。



それと共に恒雄の方でも、美津代が歸つて来たとして、別段他のやうに喧ぐでも無し、また親しく語るのでも無いから、自分の功を矜るやうな事は勿論仕ない。では、急に疎んじ出したかと云ふに、決してそんな事は無いのである。

こんな調子で、美津代は自分の爲めに今回恒雄が骨を折つて呉れたとは思つて居るけれど、それが軌位の程度であるかは知らない。否、却つて然程までの力があつたとは、更に知らないで居た。

處が、或日の夕、美津代は暇を得て納涼がてら庭園に下立ち、泉水の邊りを逍遙して居ると突然、

「美津代さん、入らっしゃいな」と云ふ聲が聴けた。

美津代は聲のする方を見ると、それは築山の彼方にある四阿の中から、お鶴が此方に向いて呼ぶのだと知れた。

素より氣の合した同士の事として美津代は直ぐに其の方へと歩み移した。お鶴は笑ひながらそれを迎へて、

「今お暇なの」と云ふ。

「あゝ稍く暇になつたの。今日は随分忙しい思ひをしてよ」

「然うだつたわね。彼様入替り立換りお客があつては、堪つたものぢやないわ……來月は妾の番なのね」

「然うよ、來月は代りませうね……貴女お一人、姫様は」と四邊を見廻した。

「姫様は奥方の御用召で、只今お奥へ行つて居らっしゃいますわ」

「姫様は相變らず電車の飛乗を爲さるの」とこれも交代後の事を氣にかけて居る。

「いゝわ、姫様は飛乗をして能く美津を困らしたから、最う飛乗は廢めたと仰有つて妾になつてからは一寸も爲さらんのよ」

「然うぢやア、御自身にも悪いと云ふ事をお心付になつたと見えます」

「それも貴女が先頃行つたからの事よ、姫様は貴女の出たのを非常に歎かれて、圓山さんの許へ行つて、お泣きなつたさうですわ、本當にお可哀相だつたのよ」

「わゝッ、圓山さん許でお泣きになつたの……お愛憐いわね」

「だから貴女の歸つたのを、大層お喜びだわ」

「本當にね、皆様に心配掛けて濟まなかつたわ」



「何も貴女、然う小さくなる事は無いのよ。其の原因は他に有るぢやありませんか」と日頃氣丈の女だけに弱い事は云つて居ない。

「それでも妾の身の上に就いていろく〜と御心配して下すつたもんだもの」

「其の事ならば圓山さんが第一よ、功一級は恒雄さんですわ」と繰返して云ふ。

美津代は圓山が多少の盡力はして呉れたと思つて居るけれど、第一の功一級のこと云ふ夫程に働いて呉れたとは夢にも知らないの。

「わッ、圓山さんが……そんなに骨を折つて呉れましたの」と訊き出した。

「わッ、折りましたとも、それは大變な骨折よ」

## ( 十二 )

斯う云はれては、何處までも聴きたいのである。美津代はお鶴の顔を見て、

「妾知らないから、聞かして頂戴な」と迫る。

「彼事を知らないとは餘りだわ。本當に知らないの」

「本當よ。だつて然うぢやありませんか。妾誰から聴きますの。何人も云ふ者は無い事よ」

「然うね。成程本人は彼様だから、善い事があつても吹聴するやうな人ぢや無し、また琴似さんも云は、自分の耻だから、幾許貴女にでも云ひますまいよ。すると妾が云はなきや誰も云ふ者が無いのかね」と誇りの色を示す。

「だから、云つて聴かして頂戴よ」とますます迫つた。

「ぢや話ませう。斯うなのよ……」とお鶴は先に恒雄が邸内の奸者を除くと同時に、美津代の嫌疑を晴らさんとて、お定を欺いて一切の秘密を聴出した事を語り。

「若しこれが無かつた時には、何日分るか知れないのね。随つて貴女も、再び歸つて來られるか來れないか、それも分らなかつたのよ」と云ふ。

茲にはじめてそれと知つた美津代は、

「まア然う、妾一寸も知らなかつたわ。夫なら圓山さんに能お禮を申ませうよ。そんなに下すつたのなら何かしなくつてはなりませんまいね」と尋ねた。

「口上だけで宜いでせうよ。何も報酬を得やうとて爲すつた事ぢやあるまいから只だ其の心さへ通すれば、それで好いぢやありませんか」



「それも然うね。彼の方の事だから、よし何物を仕たとして妾風情の贈つた品をお取りさなるやうな事は有るまいかと思ふけど、夫では妾の氣が濟んわ」

「ね、宜いですよ。貴女が心底から感謝の意を表したなら、それで彼の人は満足しますよ」

「然うでせうか」と未だ安心が出来ない、二人が泉水の方に向つて、夢中になつて話して居ると、何時の間にか迂回して其の背後に出た令嬢桃代は蹺音を窃んで二人の側に進み寄り、突

然、

「ア」と云ひながら、二人の背中をボンと打つた。

「不意喰つた二人は飛上らんばかりに驚いて、

「まアお姫様……」

「お人が悪わね」と二人同時に振向た。

令嬢は莞爾笑つて居る。美津代は向直つて、

「姫様、何時の間にお來であそばしたか一寸も存じませんでしたわ」

「妾知つて居たけど故意と知らない態して居ましたの」とお鶴が云ふ。

「嘘お云ひな。其の証據に大層驚いた癖に……」と姫は遣返す。

「然う仕ないと姫様が張合拔をあそばすから」と飽迄も敗けない。

「何んなどとお云ひ、お前は剛情だからね」と云つて、姫は美津代に向つた。

「美津、お前忙しい目に逢つて居るのね、些と妾の許へ遊びにお來でな面白い事があるのよ、

昨日學校のお友達に貰つて來た寫眞は、稻毛の海水浴で、お前と圓山さんが船に腰掛けて話して居ると其の後へ妾が出て、舷側に手を掛けて居る處が映寫つて居るが、今少し遅れて二人が仰向になつた處を寫せば尙ほ好かつたと思ふわ」

「わ、そんなのをお貰遊して……まア誰が撮たでせう、人の悪そんな處を」

「それはお友達の兄さんが、同じく海水浴に行つて撮つたのよ」

「あ、然う聞と彼の時向の方に、寫眞機を携た人が居ましたよ。憎らしいわね」

「好紀念だから、妾貰つて來たのよ」と桃代は得意で居る。

(十三)

豊平家には或夜遅くまで來客があつて、それを送つて一同が寢に就いたのは、午前の一時前



であつた。

美津代はトロ／＼と眠つたと思ふと、常には無い便通を催して眼が醒めたので起つて便所に行く、何處からかバチ／＼と異な音がする。不思議に思ひながら用を足して、聽て雨戸を一枚繰つて見ると、驚くべし、湯殿の外側から火焰濠々と昇つて、今にも屋根に燃移らんとして居る。

愕いた美津代は、直ちに急を家中に告げて、自分は先に立つて消防に努めた。

夫と聞傳へた家令家扶、書生に車夫馬丁の駆付けた時には、小間使に下女の女連が、必死となつて水を掛けて居る最中であつた。

それと見た子爵の殿は、女に怪我でも爲してはその心配からして、

「女子どもは退いて水を運べ男は進んで消せよ／＼」と令を傳へた。

斯う皆々が協力して消防に盡力した甲斐があつて、火は程なく消れた。まづ公向にもしないので早く消止める事を得たのは、主として協同作業の力に由るが、若し其の發見が今少し遅かつたならば、如何に皆々が共同して働いたとしても、決して消す事は出来ない。此の點からして美津代が發見の功は實に大なるものであつた。

それにしても警察へは一應届けて置かねばなるまいと夜の明くるを待つて所轄署へ届出したすると、程なく警部と一名の刑事がやつて来て、現場を一見した上、前後の模様を聴取つて、

「これは何うも放火らしい」と言出した。

それは風呂の火を落したのが宵の口で、發火の時刻までに六七時間もあつて、其の間火氣の潜む道理が無い。それに發火の一時間はかり前、火見廻りが邸内を巡つた時には、何等の異状も無かつた。今一つは其の發火の場所が風呂釜の有る所とは反對の方向で、而も火は外部に發して其の傍に燐寸の燃残が遺つて居た。多分前夜邸に於いては遅くまで客があつて皆が疲れて寝込んだ其の寢入端を見掛けて仕た事に違ひないと云ふのであつた。

すると、信州から来て居る飯焚女が、

「三四日前の朝、私はア薪取りに行く物置の隅ン所へ、石油を注いだ襪襪に炭俵が冠せてあつたア」と云ふ。

警部はこれに就いて、尙ほ種々と訊いて居た。それに依つていよいよ放火に相違ない事が分つた。

斯うなると警察も捨て置けない。茲に放火犯人の檢舉といふ事が起つて来る。



警察では種々取調に着手したが、廣い邸の事だから、外から入らうと思へば何處からでも忍込む事が出来るが、何うも忍入つたやうな形跡が無い。それでは犯人は内部にあるだらうとの見込みで、先づ一般の雇人に目を注げた。

而してだん／＼調べて行くけれど、少しのアタリも無い、いろ／＼と苦心した結果、発見者たる美津代を再三再四召喚して、嚴重な取調を行ふのであつた。

美津代に取つては是程詰まらぬ事は無い。切角お家の大事を発見して、皆の者に告知した爲め事無きを得たのに、其の功を認めないで、却つて嫌疑者らしい取扱ひを受け、遂には留置さるゝ事となつた。

もう世間では美津代を以て、恐るべき放火の重罪犯人と認め、中にも奇を衒ふ某々新聞紙の如きは、豊平邸の放火犯人捕はると題して、無責任極まる記事を掲げ、盛んに讀者の好奇心を挑發するに努めた。

## (十四)

如何に尋問したとて此の方は得る所が無いので、美津代は一旦釋放され今度は更に方面を變へて、日頃豊平家へ出入する者に就いて取調を始めた。

それと同時に、若しや同家に對して怨みを抱くやうな者は無いかと探つて見た。

すると、先頃小間使が三人同時に暇が出たが、併し、恨みを抱く事はあるまいとの事に、それでも、悪事を働くほどの者は、非常に他を妬むもので、所謂旋毛曲りの根性の僻んだ者ばかりだから、大いに此の方が有望だと、早速此の方面に活動した。

處が、これにも望みが少い、けれど、これを外にしては、最早手の付けやうが無いので、是非とも此の中より犯罪の迹を発見しやうと苦心した。

乃で刑事は又も豊平家に出張して何か少しでも手掛りとなるやうなものはと些細の事まで洩さず取調に及んだ。其結果として、何者の所爲かは分らぬが、無名で而も女の手蹟に成る脅迫状が、圓山恒雄宛に數々舞込んで來る事が知れた。

今回は此の手紙を根據として、有らゆる方面から取調を進めて行つた。何うやら望みが有るらしい。

これに力を得た係官はいよ／＼熱心に取調を續けた。すると、手紙はお定の手に書かれて、



而して同人から送つたのだと判明した。が、未だ放火とこれとの連鎖は取れない。

然るに、不圖した事からそれが解つた。それは先に三人同時に召喚され、取調の末、放免された彼のお瀧が、未だ留置されて居るお定に送つた手紙の中に、

「我々を追出した跡へ、美津代を入れるは當然の事で妾等二人は何とも思はぬけれど圓山に欺されたお前様は定めし口惜しからうそれと共に不義はお家の御法度なるにそれを仕向る其方は不埒と云て追出した豊平家に同じ不埒者を入れるとは何事ぞ。お前様が不義者なら美津代も不義者。同じ男を戀しながら此方は不可に彼方は構はぬと云ふ法があるものか。餘りそれは勝手過ぎる。子爵の五爵のと聞いて呆れる。お前様の恨むのも道理に思ふ」

こんな事が記してあつたので、扱はと厳しく尋問に及ぶと、遂々包み切れないで白状した。

憎い男と悪い女、それを庇つて置く主人は尙更憎い。……此の憎い者等の集つた家に、寧ろ火を放けて焼いたら怨みが晴れやうと、偕てこそ放火を思立つたのであるが、最初は氣後れして火も放けず二度目にやうやく火を放けながら、早く發見されて目的を達せず、三度目には必ず遂やうと、其の用意の最中つひに捕はれたと云ふのが、お定の申立である。

茲に初めて眞の犯人が檢擧つた。爲めに今迄尠からぬ迷惑を感じて居た美津代は、漸くにして青天白日の身である事が世間に知れ、はじめて肩身の廣さを覺れた。

或時、用事があつて奥に行くお奥方が、

「美津や、お前も當邸へ來てから思はぬ災難が度々起つて、其の都度大層心配をさせせたが、もう此の調子では無いやうだから、先づ安心をなささい。假令また起つたところで、當邸ではもうお前を信用して居るから、どんな事があらうと決して氣を落さないでお居てよ」と慰められる。

「何んの上様、これしきの事で氣を落すやうな事は御在ません、未だく美津は將來どんな難辛苦に出逢ふか分りませんが、それと闘つて必らず打克つて行かうと思つて居ますから、今迄のやうな事で挫けは致しません。何うぞ然様思召して下さいませ。併し毎度ながら御親切なお言葉を頂戴して、寔に有難う存じます」と心底から感謝の意を表した。奥方もまた此の言葉を頼母しく思はれた。



(十五)

「圓山さん、これ御覧なさいよ、二人とも能く出て居るぢやありませんか。殺生たねね、こんな處を撮るなんて」と美津代は一葉の寫眞を恒雄に手渡して、俱に覗き込むやうに見るのである。

恒雄は見るより忽ち笑を浮かべて、

「ヤッ、大變な處を撮られたね。如何してこれが手に入ったのです」と不審を起した。

「貴郎驚いたでせう。お姫様から拜借したのですよ」

「姫様が如何して持つてるのでせう」

「彼の時ね、同じ稻毛に行つてたお友達のお兄さんが寫したのですと。……それをお姫様に見せたものですか、貰つてお歸りになつたのださうですわ」

「然うですか。それでも未だ此の時宜かつたですよ、二人が轉倒つた處でも撮られちゃ、醜態は無いです」

「妾も然う思ひますの、ホンの僅かな違ひで彼の馬鹿な目に遇つた處を撮れないで仕合せですよ。……それとも矢張撮られて居やしないでせうか」と心配顔。

「否や〜。別の人が撮れば知らんこと如何に早取でもホンの刹那の事ですからね然う手っ取敏く行くものぢありません」

「ぢやあ外に無かつたやうだから、まア安心ですわ」

「然うです。寫眞機を携へたのは、然う幾人も無かつたやうですから」

「只た一人でしたわね。……それがこんな事をするから、憎らしいぢやありませんか」

「でも、好い畫題ですよ。實際斯うすると油繪にしても立派なものです」と指頭で令嬢の顔を被ひ障した。

「お姫様は紀念にするツて、大切にしてお居なさいませよ」

「紀念になら、此方が欲しいですね。これを除つて複寫すると宜いです」

「然うね……」とは云つたが、美津代も其處までは勧めなかつた。

寫眞の話はこれで一段落を告げ、更に他の話に移つて、二人は暫く興に入つて居たが聽て美津代は襟を正し、



「貴郎にお禮を申さう／＼と思ひながら、遂度機が無いものだから寔に失禮致しました」

「何んの貴女、それには及ばないです」

「いね、日外簗筒町の通りでもお目に掛つてお願ひ申したし、それに邸へ歸つても、妾は然程とは存じませんでした。聞けば三人の悪い事を知つて、妾の身の明証を立て、下すつたのは矢張貴郎でしたッてね。其のお骨折は大抵ぢやありませんでしたらう……」

「そんな事を貴女誰に聞きました」と微笑を含んで云ふ。

「お鶴さんから聴きましたの若し彼の人が云つて呉れなかつたら、妾が未だ知らないで居る處でしたわ」

「お喋舌だね。そんな事を黙つて居れば宜いのに」

「本當にね、妾や其の事を聞いた時には嬉し涙が零れましたわ。今にはじめぬ貴郎の御心切は妾死んでも忘れませんよ」と心の奥底から、押出すやうな調子で云つた。

「そんなに云つて貰つては、却つて恐縮する。僕は只だ訊き出して、それを子爵御夫婦に告げたまへだから」と少しも手柄顔をしない。美津代はますます其人物に感心して、

「妾や貴郎のやうな兄さんが欲しいわ。一人坊程で淋しいから」

「僕も、貴女のやうな妹があると好いに……」

### (十六)

其の中に美津代はまた令嬢附となつて毎日學校へお供をするやうになつた、姫の悦びは一方でない、折り／＼抛ねて見せたり、無理を云つては、美津代の困るのを興がつて居た。

或日、豊平家に於いては主人清康の還暦の祝ひが催された。これに招かれたのは家族同伴の親族知己の方々をはじめ日頃同家へ出入する同族間の勢力家をも交へて、非常な盛會である、場所は同邸の庭園に面した大廣間で、馳走は日本料理、これが給仕には新橋より數名の大小藝妓を聘して、酒間を斡旋せしめた、尙ほ補助として小間使一同も其の中に立交つて働いた。

餘興には洋行歸り、手品、筑前琵琶、某の新講談等があつて、お容は大層な御機嫌である。初めの程は孰れも行儀よくして居たが、酔の廻るに従つてだん／＼無禮講となり、中には令夫人の側に居ることも忘れて、給仕の半玉に戯口利いて白眼まれる不嗜のもあつた。

併し、何と云つても最後の賞翫は女で客は黒人を好者と素人を好む者との別があつて、自か



ら藝妓派と小間使組との二つに分れた。

時に此の宴の主賓である大國候爵は年も若いし、金が喰るほどあるところから、花柳界に於いては福の神の殿様とまで渾名を呼ばれた粹者であるが此日宴席に侍した美津代を見て太く其の美に撲たれ、自ら呼んで酌を命じられたが美津代の方でも此の人がお家の珍客と思へば出来得る丈け鄭重の取扱ひをするのでます。候爵の御意に副ひ、

「其方の名は何んと云ふ」と尋ねられた。

「美津代と申します」と耻しうに答た。

「美津代、うむ好い名ぢやな、其方は何日頃から當家へ參つて居る」などと問はれ、始終自分の側に引付けて、一寸も放さない。

此の様を見て、堪兼ねた連中は、

「大國の御前、然う錨を下させてお置きになると牡蠣が付きまますよ」と皮肉る、すると、候爵は得意満面の体で、

「然う鷹を嫉んだとて仕方が無い、先方に粘着力を有つて居て、少しも離れんからね」と納り返へる。

「それは反對の、御前の方で御在せう」と肉薄する。

其處へ當家の主人清康が來られて、お流れ頂戴と出られたので、候爵は盃を献しながら、「豊平さん、實に今日は結構なお祝ひです。予も近來に無い愉快を覺て、是程嬉しい事は無い。……時に此處に居る此の美津代は、世にも得難い美人で御座るな。これ程の縹緞の女を、朝夕お膝下に置いて置いて樂しまるゝ、貴下の果報は羨ましい」

端然として聞いて居られた子爵は、片手に鬚を弄りながら、

「はッはッ、何を仰せらるゝかと思へば女子の事で御座るか。私も今十年若かつたならば、白髮染に頭を隠して、若い女どもの媚を獲やうとするかも知れませんが、何を云ふにも此の年齢では誰も相手になつて呉れる者は無し、また自分にもこれを挑まうとの念も起らるので、頓ど其方には縁が御座らぬ」

此のキツパリとした答へには、有繋の候爵も面を喰つて、尠なからず極りの悪い思ひをし



( 十七 )

美津代は姫のお供をして學校より歸り、脱棄てた袴羽織からお荷物などを片付けて居ると、其處へ房江が来て、

「殿様のお召ですよ」と云ふ。

「わッ、お姫様ぢや無くつて？妾に……」と少々意外に思つて訊くと、

「然うですよ、貴女なの」といよ／＼紛れも無い。

「ぢやア只今参りますと申上げて下さい」

「承知しました」と房江が去つた跡で美津代は片付物を急ぎながら、今頃殿様のお召は何事であらう、若しや北海道の人でも来て、それに妾を紹介さうとの思召ではあるまいか。それとも何かお氣に召さぬ事でもあつて、お叱りを蒙るのでは無からうかと、いろ／＼な事を思つて漸く離座敷を立出でた。

行て見ると子爵は書齋に居られて客も何も無い只だ一人だ、扱てはと思つて御前に座ると、殿

はツク／＼と顔を見られて、

「美津、今日はお前に無理を云はにやならんが、聽いて呉れるか如何ぢやな」との言である。

無理と云はれるからには、無論難題には違ひあるまいが、それにしても無理と承知して云はれるのだから、どんな事であらうかと考へながら、

「何ういふ事は存じませんが、妾の身に副ふ事で御在りましたなら……」と終ひをハッキリと云はない。

「む、それは副ふ事でもあり、また叶はん事でもあると私は思ふのぢやよ。……今日私は此間の祝宴に来て貰ふたお禮は麴町の山國候爵方を訪問した處が先達て來れたソレ彼當主はの一方ならぬ御執心で是非其方を邸へと云のぢやよ。迎もと思ふから、私は其を断たぢやが其でも強どの御所望其方も知通候爵家は△△の舊藩主で私には舊の主人ぢやらう。だから如何に思止らせやうとしても、一旦言出したからには後へは退かぬ猪武者が、如何して肯くものぢや無い、昔し陪臣が主人の眼鏡に叶ふて、直參となつた例もあれば、今本人を此方へ寄越したとて悪くは無からうと云ふのぢや。そりや成程、昔しは一向其の様な事を構はんばかりか、却つてそれを名譽として歡んだものぢやが、今では人權を重んずる世の中ぢやから軍隊以外本人の意



嚮に違はねばならんと云ふと、それでは是非當人に話して必らず來るやうにして貰ひたいと、斯う云ふのぢや、如何ぢやな、そりや無論それでは參りませうと云ふ其方で無い事は充分承知もして居るし、また手前の方でも其方は手放し難いけれど何分にも今申したやうな關係ぢやから、嫌で無くば行つて呉れんか。のう美津、黙つて居らんで、何んどか返事をせい』

美津代は無言の儘暫く考へて居たがやうく口を開いて、  
『何事を仰せられるかと思つて居ましたら、此の日頃天國のやうに思つて居る、當お邸を去つて、見も知らぬ、大國家へ參れとの御仰せ、成程殿様の舊御主人方で御在ますから、定めし御結構な所で御在ませう。……如何に御結構な所かは存じませんが、美津は御當家を去るのは嫌で御在ます。……殿様のお言葉に背くは甚だ恐れ多い事で御在ますけれどこればかりは何うぞ御勘辨あそばして下さいまし』と斷つた。

『む、然うか……』と云ひながら、子爵は尙ほも腕を粗んで考へて居た。  
常には淡白な清康も斯る些末の事ながら自分の舊藩主の頼みとあつては然う無下に斷る事もならずまた一旦引受けたからにはこれが不成功に終るのを快としな。それでは如何したら宜いかと更に考へを新たにしたら。

( 十八 )

子爵はジツと考へた末、こんな事は火急に運ぶもので無いと思つたのか、それとも好い思案の浮かばなかつたものか、

『ぢやア何も今直ぐにと云ふのぢや無いから今一度寛緩と考へて呉れい』と云つて部屋に返した。

美津代は其の翌日も翌々日も姫からいろくど面白い事を云はれても一向氣分が引立たず物思ひに日を送つて居ると、桃代もそれと悟つて三日目の夜、

『美津お前は何處か悪いのぢやないかね、何んだか此の二三日は變だよ。悪いのなら我慢して居る事は無いから早くお醫者に診て貰ふが宜いわ。……それとも何か心配事でも起つたのなら此の前のやうに隠す事は無い妾に打明けてお呉れ』と云ふのであつた。

美津代は此の言葉を聞いて令嬢が召使を思ふの厚きに感泣したが若し此の事を話して殿から自分獨りの胸に疊んで置けば宜いのに餘計な事を姫に喋舌つたと思はれては心外だからそれは



一切黙つて居ませうと考へ、

「いね、何處も悪い事も無ければ心配などは御在ませんのよ」と誤魔化さうとしたが却々姫は敏いもの。

「嘘よ。お前がどんなに隠さうとしたつて、妾にはちやんと分つて居るわ。……お前再昨日お父様の許へ呼ばれて、何か云はれた事があるだらう。それがお前の心配の種なんだよ。……ごんな事を云はれたのか包ます妾にお云ひなね」

圖星を刺された此の一言に、美津代は尠からず愕いた。茲まで分つて居るものを、今更隠しても詮ない事、それを兎や角う云つて逃げるのは、却つて疑ひを招く因である。殿に何んと思はれても構はない、寧ろその事打明けて了はうと決心した。

「や、これは姫様妾が悪る御在ました。餘計な心配をお爲せ申すでも無いと思つて、それでおんな事を云ひましたが、其處まで御承知なら隠す事は無いから事實有の儘を申上げませう。……實はね殿様が、大國侯爵家へ參れと仰有いますので御在ますよ。……妾は今更御當家を辭して、他へ參る事は嫌で御在ますと御辭退申上げましたけれど、殿様はお聽入れ下さらないで、尙ほ能く考へよと仰有つたので、それで密かに心配致して居るので御在ますわ」と答へた、聞

くより桃代は驚いて、

「わゝッ、お父様が彼の大國家へ美津に往くと仰有つたの。……ちやア此間の祝ひに殿様がお來でになつて、大層美津を褒めて居らつしやつたが、氣に入つて欲しくなつたのだらうよ。幾許お父様の舊殿でも、それは餘りだわね」と其の推量も違はない。

「然うで御在ますの。お邸の殿様が此間のお禮にお出でになりましたら、先方の殿様が強て妾を寄越せと仰有つて、如何に御辭退あそばしてもお肯入が無かつたのださうです。それで殿様も嫌々ながら妾をお説きになるやうな御模様が見えます」と自分の推察まで加へて云つた。

「然うか、それならば妾からお父様に願つて、是非ともお前を邸へ残すやうに爲るわ。然う心配しないでお居でよ屹度行かないでも宜いやうになるから安心してお居で」と慰めた。

「ちやア何うか然うなるやうに、姫様お願ひ申します」と稍く安堵の胸を撫下した。

(十九)

令嬢の抗議に依つて、美津代所望の事は全くおぢやんになつて了つた。喜んだのは當の美津



代ばかりで無い令嬢をはじめ子爵夫妻までがそれであつた。

其の中に恒雄の兄さんが來ると云ふ事が傳へられた。其の人は現今月寒に牧場を經營して居て豊商務省へ出頭の序に來ると云ふのである。

これを聞いた美津代は、日頃自分が尊敬して居る恒雄の兄と云ふからには、定めし男らしい頼母しげのある人であらう、それとも反對に、そは、くした輕薄な男であらうか。孰れにしても北海道から來るのであるから、恒雄さんに紹介して貰つて其の人に就いて篤と父母の事を訊いて見やう。願はくば其の人が弟の恒雄さんのやうに沈着て親切な方だと宜いと思つて居る。

此の待設けられた恒雄の兄は程なく出京して豊平家を訪づれた。

子爵には以前自分の部下に居て親しくして居た者が久振りに尋ねて來たさへあるに昔時のベイク／＼では無く今では全道に隠れなき牧場の主となつて立派な紳士と成果せた圓山直隆を歡んで迎へられた。

そして直隆が飲む口なところから、子爵は一應の挨拶が済むと直ぐに酒々と命じられた。

此日は恰度日曜日であるので美津代は朝から邸に居て姫の側に附いてゐたが、待受けた人が來たと知つて、それとなく庭に下立ち、書院に於いて殿と對談中を垣間見ると、生憎庭の方に

背を向けて居るので、其の面差は分らないが、デツブリと肥れた、毛髮の眞黒な男で、口の利きやう、身軀の動作も、輕卒な人では無いやうだ。

それとはなしに聞いて居ると、話は札幌の事はかりで、子爵は君々と仰せられ直隆は閣下々々と呼んで居る。

聽て殿の注意に依つて、お鶴が令嬢の許へ差向けられた。

「美津代さん、殿様が貴女と暫くの間交代するやうにどの仰せで御在ますの」と云ふ。

「ぢやア彼のお客様に……」

「然うですよ。圓山さんのお兄さん」

「然うだつてね。どんな方？」

「恒雄さんに酷似て居ますわ。只だ瘦せたど肥れたの違ひよ」

美津代は早く行て父母の事を聞いて見やうと思ふので、何んもなく心も引立つた、急ぎ身繕ひして其の場に行く、何時の間にか奥方も同席されて、孰れも親しげに酒酌交して語合つて居られる。

座に侍つて初めて客の顔を見ると、成程、お鶴の云つた通り、弟に酷肖だ。が、鈍々として頼



鬚を蓄へて居るので、非常に威克く見えた。

そののみならず沈着いた態度から音聲までが似て居て、どんな初めての人に云はしても、兄弟と云ふ事は誤るまい、血筋と云ふものは争へぬものだ、美津代はツク／＼と思つた。

お銚子の数はだん／＼殖れて、主客の耳はますます／＼熱して来たが、談話は只だ彼れへ彼へと移つて行くばかり、更に一つ事に止まつて居ない、そして、それが孰れも北海道の事ばかりである。

座席の斡旋をしながら、傍からこれを聞いて居る美津代は、其の話の中にも親の名は無いかと心を緩めない、それと同時に、自分が此の人に就いて、直接訊く機會の來るのを待つて居た。

## ( 二十 )

美津代は曾て此の人が来たならば、恒雄に紹介を頼まうと思つて居たが、それにも及ばないで、主人の親切に依りて接近する事を得たのを喜んで居ると、更に子は話の絶間を見て、

「話は違ふが、君松岡義勝と云ふ人知らんかね單に北海道とばかりで、頗る茫漠として居るが、若しや君の心當りでも無いかと思つて訊くのぢや」

客は頭を斜めにして、

「松岡義勝ですな」と云ひながら、頻りと記憶を探つて居る。

「それでも、松岡とよでも宜いので御在ますよ」と奥方が口を添へられた。美津代は全身の注意を耳に集めて、一生懸命に待つて居る。

「然様、松岡姓を名乗る家は、札幌にも大分ありますが、義勝と云ふのは無いやうですよ。とよと申しますのは、其の家族でせうな」と云ふ。美津代が此の人に期待した事は、殆んど空に歸して了つた。

「然うで御在ますよ。何れ札幌に限つた事は無い、北海道中に若しや今云つた名前の者があつたなら、圓山さん面倒でも知らして下さいな」と奥方は疎漏が無い。

「承知致しました……。一体それはどんな御關係があるのですか。そして何處の産れの人でせう」と尋ねた。

「や、どんな關係と云ふて、此處に居る此の小間使の兩親でな……。實に同情すべきものぢやが



君詳しい事を當人から聞いて遣つて呉れい」

「では、閣下の御關係では無いですな」

「いわ、邸の關係では御在ませんが、斯うして抱けて居れば、矢張邸の關係も同じ事で……」  
と奥方は逃がさない。

美津代は待構へた機會は此の時と、奥方に紹介はされて初對面の挨拶を爲し、

「嗚ぞお聞きしいで御在ませうが、一應お聞き下さいまし……」と、それから諄々と説起した。

客は最初のほどは多少迷惑の色が見れて居たが、語るに随つてだん／＼と其の色も薄らぎ、遂には却つて同情の念を以て聞き出した。

此の話を熱心に聽いて居た直隆は、美津代の談了るを待つて、

「然うですか、それは寔に氣の毒な事ですなア。……いや閣下、私も歸りましたら此の人の爲めに、北海道中の知邊を尋ねて見ませう」

「む、何うか然うして遣つて呉れい。乃公も大分以前から心掛けて居るけど、却々分らんでのう」

「本當に圓山さん、搜して遣つて下さいましよ」

「承知仕りました」

「何うぞ宜しうお願ひ申します」と美津代も其の尾に付いて云つた」

「さ、圓山君！乾け給へ、大層眞面目な話を聞かして、氣が滅入つて了つたやうちや陽氣に飲らうよ」と子爵は俯められる。

「わ、閣下遠慮なく頂戴します。……いや、世間には種々な事情の伏在して居る人がありますな」

「圓山さん、お重ねなさいませよ。種々な事情のあるものも澤山御在ますが、其の中でも此の美津のやうなのは餘り御在ますまいよ。何分生れ落ちたなり、兩親の行端が分らないのですからね」

美津代は此の人に依つて或ひは知る事が出来やうかと思つて居たが、それは全く無駄であつたけれど、併し、向後此の人の方に依つて分るやうな事にでもならば、其の時はどんなにか嬉しいであらう、それを思ふと、矢張此の人が大切であると、心を痛めて款待した。



直隆と恒雄とは外貌に於いても氣質に於いても、それ程までに酷似て居ながら何故か餘り氣が合はない、他から見ると眞の兄弟が、幾年振りに逢つたのであるから、互に喜んで親しみ合ふであらうと思はれるが、實際は然うで無い、恰度通り一遍の知人が、一堂の下に會した時のやうな有様で、只だ必要な事に口を利くばかり、兩人が間には絶えて温情と云ふものが無い。他人同士でもこんなのは稀しい位。

それではお互ひに他の事を顧みないかと云ふと、決して然うで無い、双方とも爲すべき事は屹度爲る。結局内部には同じ血が流れて居ても、其の表面には厚い氷が張詰めて居るのだ。此の氷は何日解ける事やら、或は遂に釋けずに終るかも知れない。或る人はこれを以て家庭の嚴格に失する弊だと云ふが、如何もそればかりでは無いらしい。

「美津代さん、圓山さんは何故彼様なんぞでせう。後にも前にも兄弟は二人だけぢやありませんか。妾等は四人兄妹だけであんな事は無いわ。皆な仲が好い事よ。只た二人位だつたら、もつ

と睦じくされさうなものだわね」とお鶴が云ふ。

「妾はホンの一人坊裡で、兄弟姉妹の味が解らないのよ。……極く仲の悪い初中終喧嘩するやうなのでも宜いから姉妹があつたらと思ふわ」

「然う仲の悪いのなら、寧ろ無い方が宜いのよ。併し、貴女のやうに無いと然う思ふのも無理は無いわ」

「それぢや矢張圓山さんのやうなのが宜いかも知れないのね。兄弟喧嘩を爲る心配は無いから」

「いゝね、有る以上は好いとか悪いとか、一方に極らない事には嫌よ、孰方附かずの半熟では何んにも成らないわ」

「眞實然うである。有るか無しのものなら、無い方が宜い、有るからには必らず便りにもし、また頼りに爲れるやうで無い事には、何にもならない、日外妾に向つて、貴女のやうな妹が欲しいと云はれたが、矢張恒雄さんも其の邊の事を思つて居なさに違ひない。然うだくと美津代は心に領いた。

直隆は一週間の後國へ歸つた。滞在中只の一度も連立ちて何處へも行つた事の無かつた恒雄



は、それでも此の時は上野まで送つて行つた。而して常盤華壇で共に飯を食べたとて、土産の折を美津代に呉れた。

其の後で、美津代は尙ほ頼んだ事が氣に掛るので、直隆は今日あたり着いたらうと云ふ日に更に手紙を認めて、滞在中の無禮を謝し、先に依頼した件を呉々も頼む由申送つたのであつた。

美津代は廊下で恒雄に逢つた時、

「圓山さん、此間手紙を出して、重ねてお頼みして置きましたが、お兄さんは如何思つてお居でなさるでせうか。定めし厚顔しい奴だと思はれて居せうよ」

「いね、そんな事はありますまい。貴女の事を氣の毒だと云つて、大層同情して居したから」

「然う、それなら安心だけど、餘りお頼みして濟みませんわ。随分着蠅からうとは思つて居ますが、他に頼む所もありませんので、遂ひ無理を申しますよ」

「構ひませんよ。其の位な事を蒼蠅がやうな男ぢや無いです。併し、事柄が事柄だから、お互ひに根氣よくせん事には駄目ですわ」

「尙ほ貴郎からも、お序の節に頼んで下さいな。願ひますよ」

折柄、其處へ藤野が來たので、二人が話を廢めて了つた。

( 二十二 )

或日の午後、美津代が學校からお供をして歸つて來ると、何時にも無い電話が掛つて來た、先方が誰かと尋ねると「小川」との事に、扱ては隅江さんが何用あつての事かと、急いで電話口に立つと、

「急に話したい事が出來たから、一度夜でも來て下さいな。決して時間は取らせませんから」どの事である。それでは御主人に暇を願つて、今夜か明日の晩の内に行きませうと答へた。

美津代は其の夜許しを得て氷川町に行くと、隅江は湯に行つて不在であつたが例の婆やは、「お久振りでしたね。今晚か明晩はお來でになるだらうと云つて、貴女のお越しを待つて居らツしやいますよ」

「然う、濟まないわね。婆やさん寔に失禮だけど、これは奥方の御不用になつたのを頂いたので、妾には餘りくすむで居て用ゐる悪いから、貴女使つて下さいな」と風呂敷の中から取出して



老婆に與へた。

「ね、これは何んで御在ますの。あ、襦袢の袖です、ね、上ツ方のお用ひになつたのだから品が好  
う御在ます。これは結構な物を頂きました。恰度不斷のがイケなくなつて、何か買はうと思つ  
て居た處でした。それちや好いのを不斷に下して、これを他所行のにしませうよと頗る恐悦の  
体である。

其處へ湯から隅江が歸つて來た。

「おや、大層待たせましたね」

「いね、只今來た處ですわ……大變御無沙汰しました、何か好い事でもあるのですか」と尋ね  
た。

「ね、一寸……」と言淀んで、茶を淹れながら、

「こんな事を云つても如何かとは思ひますが、それでも貴女の希望の一端だからお話するので  
すわ。其の話と云ふのはね、某華族家に於いて、是非貴女を抱たいと云ふのださうです。而  
して學校へでも通ふのならば、其の暇も午後ならば、遣らうし、學費も出さうと云ふことで  
すから、それには條件があらうと訊くと、決してそんなものは無い。只だ令嬢の學校へ行く送り

迎へをすれば宜しいと云ひますから、それなら恰度好からうと思つてね、それでお話するので  
すわ」と一寸相手の顔を見た。

成程話の通りならば誠に結構だが、如何に華族だとして油断のならぬ世の中、何うしてそんな  
事を云ふのであらう。話がチト甘過ぎると思つたから、美津代は、

「さア、其の通りに違ひ無ければ宜いが話が好過ぎるぢやありませんか」

「然う、私も然う思つたから、だん／＼尋ねて見たら、決して心配な事は無い貴女の人物を見  
抜いて云ふのだからと云ふのよ。では、何處で知つて居るかど訊くと、先方の令嬢も同じ學習  
院女子部へ通學されるので、貴女の事はよく知つて居て、其の令嬢が是非貴女をと云ふので  
ござ」

「へい、ぢや其の華族は一体何處なんですか」

「それは麴町のね、富有華族として有名な侯爵よ」

「富有華族の侯爵つて……」

「然う云へば名前を云はないでも、直ぐ分る位人の知つてる家だわ」

「でも、妾は知らないのよ。聞かして頂戴な」



「それ、大國家よ」

「あア彼れですか」と冷かな笑を洩らした。

「然うよ、解つたでせう」

「道理で話が甘過ぎる筈だ。……彼處なら問題にならないわ」と嚙で吐出すやうに云ふ。

隅江は不思議に思つて、

「わつ、貴女先方の様子を知つてるの」と訊き出した。

(二十三)

「わ、知つてますとも、令嬢などは虚言です、其本尊は侯爵自身なのよ」

此の意外の言葉に、隅江は眞實驚いて、

「へい……如何して貴女それを知つてるの」と訊く。

「それはね、斯うなのよ。……」と彼の宴會の事から侯爵の所望、子爵が其の請を拒み難ねて自分を説いた事それを知つて令嬢が異議を唱へ遂に拒絶した事まで遺漏なく話した。

「まア、呆れた殿様わだね。……それで今度は手を替へて妾の方へ来たのですね。驚いたわ妾もね、それが滅多な所から来たのなら直ぐと斷つて了ふけど、相當な人からの話で十分信用が出来ると思つたから、それで受附けたのですわ」

「へい、それは貴女の御意な方なの」

「わ、懇意よ。妾の學校に居る人ぢや無いけど矢張教育に従事してる人よ」

「こんな事が教育者の手を経て來やうとは全く意外ですね」

「尤も、其の人は頼まれたので、何も事情を知らないのですわ」

「それにしても、侯爵が貴女の事を知るとは、随分探つたものですね」

「これで先方は却々苦心して居るのでせうよ」

「それに違ひありません。お邸の殿様まで使ふ所を見ると、餘ッ程苦勞して居ることが分りますわ」

「あ、迂濶に物は引受けられないわね、これが未だ貴女だから宜いが、若し他の人であつて御覽なさい、妾までが輕蔑を受けますわ」

「然うね」と云つて頼まれれば然う／＼斷つてばかりも居られず……困つたものですね」



「然うですよ。……時にお邸の方は、何も變つた事はありませんか」と話を他に轉じた。

「は、別段變りは無いのよ」

「貴女、當月は執方でしたね」

「令嬢の方ですわ」

「少しは北海道の手掛りがあましたか」

「いわ、これと云つて未だ何もありませんが、此間邸の書生さんの兄さんが、札幌に牧場を開いて居る方を見られましたので、子爵御夫婦からも頼んで下さいましたが、妾も能く頼んで置きましたわ、其の方の御親切で分るやうにと祈つて居ますのよ」

「然う、早く分れば宜いがね、却々でせうよ」と自分の事のやうに心配する。

「分るのは一ヶ所だけ、其の一ヶ所を知るには、容易い事では無いわね。……まア根氣よく捜しますの」

「其の意りでない事には可ませんわね」

二人は久振りに逢つた事とて、尙ほ種々と話合つた揚句、美津代は邸へ歸るのであるが、友思ひの隅江は、

「また日外のやうな事があつては成らないから、婆やを送らせませう」と言出した」

「なに、それには及びませんよ」と辭退した。けれど老婆が、

「妾一寸通りまで御用がありますから、御一緒に参りませう」と云ふ。これには美津代も有無なく連立つて出た。

### (二十四)

次の日曜日に美津代は用事あつて奥に行くといふ夫人が引留められて、種々と話を仕向けられる。美津代も腰を捉ゑてこれがお相手をして居ると、

「美津お前は此間氷川町へ呼ばれて行つて何か好い話でもあつたのかわ」とそれとなく様子を尋ねられる。

「はい、あれは寔に詰らない事で御座ました」と微笑を含んで答へた。

「詰らない事とは」と尙ほ追跡する。

「馬鹿々々しくつてお話も申上げられません」



「然う云やると尙ほの事聞きたいの」

美津代は餘りに隠し立てして、却つて疑ひを起すやうな事があつてはと思ひ、

「では申上げますが、上様も嘸ぞお笑ひあそばすでせう。彼の大國の殿様が、何處からか手をお廻しになりまして、小川から妾を説かせやうとなさいましたので御在ますよ」

「わゝッ、大國の御前がゝね。……ほゝ」と果して笑はれた。而して、

「……お前が餘程氣に入つたと見ゆる」

「お物好で居らせられますわね」

「それにお前は如何云つたの」

「はい、お邸であつた事を残らず話しましたら、呆れて居りました」

「然うだらう、無理はない」

「妾や可笑う御在ました」

「それをまた、小川と云ふ人が能く取次いだもののだの」と仰せられる。

「いね、何も存じないものですから、それで申したので御在ます」

「それは却て氣の毒だつたらうの。大國の御前も未だお若いから」

これで話は暫く杜絶れて居たが、聽て奥方が、

「時に美津、お前も最う好い年頃になつて、何日まで然うしても居られんから相當な所があつたら嫁婚くだらうの」と尋ねられる。此の言葉には美津代は羞しいやうな、恐ろしいやうな感じがして、頓に答へる事も出来なかつたが、やうやくの事に、

「上様、それは未だ早う御在ます」

「いね、然う云つて居る中に婚期が過ぎて了つて、遂には満足な家へ嫁けなくなります。

……それとも約束した人でもあるのかね」

「其の様な事は御在ません。それに妾は兩親に邂逅はない内は決して良人を持たないと云ふ、誓ひを心に立てゝ居りますから」

「それが宜しくありません心の誓ひなど云事は女にあつては破れ易いもので、決して立ものでは無いそれに妾が斯う云つたとして、何も今直ぐにと云ふのでは然い、其の婚約をさして置いて、聽て機を待つて結婚させやうと思ふのよ」

「それでも妾には親捜しと云ふ大仕事がありますから、結句御身の方が氣樂で宜う御在ます」  
「何も良人を持つたからとて、親を尋ねる邪魔にはなりません夫婦ともく捜せば宜いではな



「其の様な人があれば宜う御在ますが、到底御在ません」  
「何んの無いと云ふ事は無い、屹度有ります。それでは若し有つたら持つか如何だの」と却々逃がされない。

「それは持たないとも限りませんが……それにしても妾一人の料簡には参りません。保証人とも相談致した上で無くては、何んともお答へが出来ません」  
「では急いだ事は無いが、小川とも能く相談して置きなさい」

(二十五)

美津代は或日の夕、邸へ遊びに来た令嬢の友達を、笄町に送つての歸途、墓地下を過ぎて霞町に差蒐つた時は、もう日はトツブリと暮れて了つた。

少し淋しいけれど、未だ宵の口でもあり、道も近いから、大通りに出ないで三聯隊際を歩いて來ると、突然横合から一人の男が駈出して來て、

「貴女、其方へ行つては大變です。只今龍土の方から抜刀の強盜が逃げて來て此の先で人を斬りました。而して強盜は此方へ逃げて來るのだから、貴女は危険だ。彼方へ逃げなさい、早く」と促すのである。

美津代は強盜と聞いて驚きながらも、行先を透し見たが、暗の中に所々街燈のあるばかりで能くは分らない、だが、強盜は毎夜所在を襲ふて物騒極まる此の頃の事だから、これに對する美津代の神經は頗る過敏となつて居たので、前後の考へも無く、引返して其の云はるゝ方にと逃出した。

すると、其の男もついて走りながら「彼方へ」。否や、然う行つては危い……後から追付かれちや大變だ」と、美津代が大通りの方へ出やうとするのを反對の右の方へ引張つて行つた。

斯うして殆んど夢中になつて走つたが、何時しか二人は聯隊裏の練兵場に出て居つた。  
美津代が氣の付いた時はもう遅い。立止つて、  
「おやツ……」と叫びながら後方を振向く途端、發矢と顔を打たれたと。思ふ間もあらばこそ手早く猿轡を食ませられ、續いて後手に縛せられて了つた。



けれど氣丈の女だけに、美津代は手と口の自由を失ひながらも、悪漢の手を滑脱して、一生懸命に駆出した。目掛けて行くは青山墓地。

墓地には所々瓦斯燈が輝て居て、晝の如く明い。が、場所柄とて今頃人の氣勢も無い。其處へ逃込んだのだから、悪漢の爲めには仕事を爲る屈強の場所だ。

美津代は青葉隠れの茂みの中を、彼方へ潜り、此方へ抜けて逃げて行く。それを追ふ悪漢も汗タラしく、頻りと息を喘まして居る。こんな狭隘しい所に行つては、身の軽い美津代は、肥満した悪漢よりも都合が好い、彼が一ヶ所の垣を超ゆる間には、此れは二ヶ所も三ヶ所も抜けるのである。けれども悲しい事には女だ、然うは一時に足がつかぬ。

乃で、美津代は悪漢の後るゝ間々に小憩して走る。而して其の度毎、手の縛めを脱さうとしてもがくが細紐の事とて緩まない。時々石碑の角に摩付けて、切らうとするけれど、それも駄目だ。

今度は口の猿轡を除らうと思つて、頻りと肩に摩付けて見たが、濡手拭の事とてこれまた取れない。

仕方が無いから、次には電車線路に駆下りた。これは最初逃げるに氣を取られた爲め、遂ひ

心付かないで居たが、此處に來れば電車が來て人の目に罹るから、誰か助けて呉れやうと考へたので。

處が、生憎電車が來ない。一寸合間である。と云つて愚圖々々して居ては捕まるから、今度は霞町の方へ線路傳ひに逃出した。

すると、墓地下の方からバツと大きな明りが射して來た。正に電車が來たのである。美津代はそれに力を得て、疲れた足を急がした。

それと知つた悪漢は猛然として駆來り、背後より猿轡を伸ばして襟首を掴んで引戻した。其の勢ひに美津代が後へ倒れやうとするを早くも肩を入れて引擔いだ。

美津代は擔がれながらも、死力を出して跳ね出したが男の力には勝てない。遂々其の儘司令部裏の射的場に運ばれて射梁の側へと下された。危機はもう間一髪である。

## (二十六)

此の時疾し遅し聯隊裏の停留場の邊より飛鳥の如く駆付けた一人の男、突然物をも云はずに



鐵拳を惡漢の腦天目蒐けて撃下した。

此の不意の一撃を喰つて惡漢はウーンと一聲、其の場に仰返つた。

男は直ぐさま美津代を扶け起して猿轡から縛繩を解いて遣り、

「實に危い處でした。もう少しで取返しのかぬ事になるのでしたね。貴女、何處もお怪我はありませんでしたか」と云ふ。

美津代は夢かどばかり喜んで、

「誰方かは存じませんが、此の危い處をお救ひ下さいまして、お蔭で助かりまして御在ます。甚だ失禮ですが、どうか住所と御姓名を聞かして下さいませ。妾は麻布六本木の松岡美津代と申します者で……」

「や、矢張然うでしたね。私は警察の者ですが子爵邸から電話で貴女の保護願が出ましたから様子を訊いて早速出張して見ると、何うも最前墓地から駆下りた二人がそれらしいので、見ね隠れに尾けて行くと、線路で引擔いで營庭へ逃込んだから、必定此處と駆付けて見ると、果して斯うでせう。……もう安心です」と云ひながら、刑事が傍を見ると、惡漢はやうやく氣が付いてムク／＼と起上つて來た。

すると惡漢は、豫ねて呑んで居た短刀を引抜いて、

「已ぬ、よくも邪魔しやがつたな、引導渡して遣るから然う思へ」と、云ひさま斬つて蒐つた。

「何に、生意氣な」と刑事は素手で渡合つたが、敵も然る者、容易に雌雄が決しない。

傍に在つて此の様を見て居る美津代は、何んとかして加勢したいと思ふけれど、女の悲しさには如何する事も出来ぬと云つて茫然として見て居る場合で無いから千々に心を碎いて居ると闘ひながら刑事が、

「貴女今の内お逃げなさい」と注意した。

それと同時に、美津代の胸には一策が浮かんだ。

「御免あそばせ」と云ひさま其處を駆出して、轟然に墓地下に駆付け、交番へ云々と訴へた。交番の巡查はそれと聞いて、直ぐさま宙を飛んで駆付けると、今や二人は闘ひの眞最中で、動もすると刑事の方が歩が悪い。巡查はいきなり抜劍して、曲者の短刀を敲き落した。

斯うなつては如何な曲者も敵はない、隙を窺つて逃出したが、直ぐに捕へられた。

聽て交番へ引立てた、其の顔を見ると美津代が先に邸を出る時、門前で見て更に笄町に於い



て逢つた男なので、扱ては自分を跟けて居つたのだなと茲にはじめて其の大体が分つた。  
美津代が急いで邸に歸つて來ると、さア大騒ぎだ。

「美津や、如何したの」

「貴女よく歸れたわねね」と右、左から話し掛けられた。

「御心配かけて済みませんでしたね」とそれから其の顛末を話すと、皆々愕いて、

「そんな目に逢つて、それで無事とは稀しいわ。全く運が強いのだよ」と互ひに其の無事を祝した。

これから後、美津代は一寸外へ出るにも用心して、更に油断をしないのであつた。

( 二十七 )

其の中に年も暮れて、世は新玉の春となつた。それでも世間の人氣は更に革らないで、不景氣の聲到る處に充滿て居る中に、豊平家は至極無事平穩で、邸内に居る美津代の身に就いても、暫くは別段取出で、云ふ程の事も無かつた。

斯くして孝明天皇祭も過ぎ、紀元節も経つと、聽て桃の節句が近づいた、邸に於いては雛祭を兼ねて、令嬢の誕生を祝はんと、例年ながらの催しがあつた。これには女連の悦び一方では無い。

「今日は妾の誕生日だから、何か奢りませう。……何が好いか、皆な思ひ／＼に自分の好きな物を云つて御覽」と桃代が云つた。すると、皆々嬉しがつて、

「まア、貴女から」

「いね、貴女先に」と互ひに譲合つて居たが、お鶴が先づ、

「妾は永阪のお蕎麥が好う御在ます」

「房江、お前は」

「妾はお汁粉に願ひませう」

「藤野は」

「妾は橋善の天麩羅が宜しう御在ますね」

「美津、お前は何が好い」

「妾は別段これぞと申して、食物には御在ませんが、恰度今、有樂座に雲右衛門が掛つて居ま



すから、あれにお供を願ひたう御在ます』と云ふや否な、それが好いくと、皆の者が強請出した。

『お、皆好みが違うから面白い。姫様、如何あそばします』と琴似は云ふ。

令嬢はそれを笑ひながら聞いて居たが懸て、

『好矣解つた。鶴が蕎麥で、房江が汁粉、藤野が天麩羅だらう。ち……やアこれから橋善へ行って食事をし、銀座通りを散歩して、十二ヶ月でお汁粉を食べ、有樂座へ行って浪花節を聞き歸りに永阪へ寄つて来れば宜いぢやないか』との仰せだ。

『それは姫様、寔に御名案で御座ます』

『橋善へ是丈の者がゾロ／＼行つて姫様のお座りになる所がありますかね』と琴似が心配する。

『何に構はないよ。どんな所だつて人の行く所なら妾も行くわ』と極めて無頓着である。

『それでは皆な用意を爲さい』と云はれ、四人は孰れも部屋に入つて支度をした。

琴似は令嬢の世話をして居ると、桃代が、  
琴似、お前も行かないかね』と云ふ。

『さア、妾行きたい事は御座ませんが、若い者ばかりだから、行かねばなりませんまい』と無情げに云ふ。

『行かなくつても宜いよ。然う恩に被せて行つて貰はないでも好いから』

『ぢやア姫様、何うぞお連れ下さいまし』と笑つて居る。

『ぢやアなんつて、嫌よ。行くなら往くで宜いから、柔順しくお出で』と却々御機嫌が治らない。

其處へ皆々が勢揃ひに及ぶ。琴似も支度に行つて後馳に加はつた。

出掛けに姫は恒雄の部屋を覗いた。

『圓山さん貴郎も行きませんか。これから皆なで有樂座へ行くのよ』と誘ふ。机に向つて勉強中の恒雄は、

『まア、失敬します』とそれどころでない。それを心無が、

『お往でなさいよ』

『切角姫様が仰有いますから』と傍から勧める。琴似は聞兼ねて、

『圓山さんは今卒業前だから、そんな事を云つては可ません。勉強の邪魔を仕ないやう……』



と叱つた。

( 二十八 )

「美津、日外お前に話した事は、もう何んとか思案が極つたであらうの」と云ふは國子夫人である。少し離れて下手に座つた美津代は、困つたと云ふ体で、

「あ、彼の事で御在ますか。未だ小川とも相談を致しませんで……」と不得要領な返事をして居る。

奥方は羊のやうな眼を、對者の方に注いで、

「それはお前は持たうと云ふ氣が無いからだ。今時の若い女は、何日までも娘のやうな心で、華やかな時代が百年も續くやうに思つて居るけれど、そんなものではありません。殊に女は早く年の經つもので、男の活々とした色が長いから、自分も矢張然うだと思つて安心して居る中に何時の間にか艶々した色は褪めて了ひます。だからお前なども、其の美しい顔が二十年も三十年も其の儘で居ると思ふと大違ひ、自分では未だくと思つて居る間に、もう人が顧みないやうになつて了ひますぞ。此の短い嫁入り時期を無駄に過して、切角來つて居る幸福を取逃がすやうな事があつてはなりません、茲の點を篤と咀嚼けて、妾の云ふ事をお聴きなさい」と諄々として説いた。

美津代は兩手を膝の上に置いて、領垂れたまゝ考へた、成程、奥方の云はるゝ通り、女の生命とする美の時代は僅かなもので、如何な身嗜の好い人でも、到底二十年とは續かない。そして其の僅かな中での婚期は、特に短い一ト噓の間だ。此の短い一噓の間を、此の儘逸して了ふは惜しいけれど、自分には爲さねばならぬ務がある、其の務を疎かにして、一身の幸福を先にする事は何うあつても出来ない、奥方はよし持つたとて、決して邪魔にはならないと仰有るけれど、邪魔にならぬと云ふ事は無い。自然と務が疎かになるに極まつて居る、それを思ふと切角の、奥方の御親切を無にするやうだけれど、茲はお断りするより外はないと決心した。

「上様が斯うまでに仰有つて下さいますのは皆な美津の身を思召ての事と思ひますと、妾は有難さに涙が濡れますけれど、何う考へましても持たぬ方が宜しいと思はれますから、切角の思召に背くは甚だ恐れ多く御在ますが、何うか此の儀ばかりはお許しのほごを願ひます」

「お前が然う云ふのは、矢張兩親の事があるからでせう。……それなら日外も云つたやうに其



の心配は無用です。必らず邪魔にはなりません。否や却つて力となつて呉れる人であつたら好いではないか。殊にお前は兄弟姉妹も無い、頼り少の身だから真にお前の身を思ふて偽りの無い同情を寄せて呉れる人なら持つた方が那樣に好いか分らないぢやないか」と嚙んで含めるやうに云ふ。

美津代は兄妹の無い頼り少の身と云はれてヒシと胸に答へた。加之に偽りの無い同情と聞いては遽かにそれを拒むの力が抜けて了つた。

「では、そんな人が何處ぞに御在ますでせうか」と尋ねた。

「あゝ、有りますとも何處ぞにございり無きホンの手近な目と鼻の間にあります」

「わゝッ、何んと仰せられます」

「おほゝ、そんなに驚く事はない。其の人は家の玄關脇に居るではないか」

「わゝッでは彼の圓山さんで御在ますか」

「おゝお前の方がよく知つて居やる」と微笑を合む。美津代は顔を赧くした。

(二十九)

奥方は尙ほも微笑を含んで、其の柔和しい眼差を再び美津代に向けられた。

「美津や、お前も浮世の波には大分揉まれて居やるから、頼みになる人とならぬ人、と云ふ位の鑑別は疾に付けて居るであらう。彼の人は外見こそ無愛想だが、内心はなかく頼みになる男で、御前が彼地から御歸京の時、これならばこのお見込でお連れになつた位だから、將來の見込は十分にある人物です。お前を彼の男と娶はしたなら、邪魔になるやうな心配は無いのみか、却つてお前が日頃心掛けて居やる、両親の行方を捜すには都合が好からうよ……それに今回學校を卒業すると、製麻會社の技師となつて、札幌に歸る事になつて居るから尙ほの事好からうと思ひます」

「わゝッ、彼の圓山さんは、製麻會社の技師になつて、札幌へ歸られますので御在ますか」と恥しきも打忘れて問返した。

「あ、矢張御前のお口添で、最う總ての契約まで皆悉出來て了つて居ります」



美津代は日頃頼母しい人、慕はしい人と思つて居た恒雄を、而も他ならぬ主人が取持つて夫婦にしやうとの言葉に、嬉しいやら喜ばしいやら、今迄の斷つた心に引替へて、飛立つほどに思ふのであつた。

「如何だらうの、お前にさへ異存がなくなれば、双方の親元へ掛合つて、早く取纏めたいと思ふが……」と其の返事を促がされる、では、既う男の方へは話が済んで居るのだなど推した。

「はい、何うぞ宜しう願ひます」と殆んど夢中で返事をする、奥方も喜んで、

「それでは氷川町へ使ひを遣つて、小川の承諾を得る事にしませう。……何うせお前も一遍行つて、よく話をして來なさいや」と云はれる。

「御都合のお宜い時に、一寸お暇を頂いて行つて参りたう存じます」

「あゝ、何時でも宜しいよ。斯うなりや少しでも早い方がいいから、今夜にでも行つて來るが宜し」

美津代はやうやくの事に奥方の前を退つた。生れた以來此の時ほど極りの悪い思ひをした事は無い。何んだが上氣したやうで顔の熱氣が容易に冷めなつた。

考へると如何にも奥方の仰せらるゝ通り彼の人ならば邪魔になるどころか豫てより此の身の

不遇に同情してそれで無くてすら自分を庇つて居て呉れるのによゝ然うとなつたならば何角と出來得る丈けの親切を盡くして下さるに違ひない、それにまた伴はれて懐しい北海道に行つたならば、両親の事も早く分るだらうし、此の身の安心も出來る譯。あゝ久しい間の願ひが稍く一部達いて、これから其の階段に踏登るのかと思ふと、こんな嬉しい事が復とあらうか。あゝ嬉しいやら恥しいやらまたしても顔がホツと赧くなつた。

何事も知らぬ桃代姫は、美津代のイツ／＼した様を見て何んと思つたのか、

「今年の海水沿にも美津やまた一緒の行かうね。圓山さんは其の時もう居ないけどまた誰か代りが來るから、其の人に番をさせてお前も今年海にお入りよ。いゝかね」

「お姫様其の時居なくなるのは圓山さんばかりぢやありません。美津は最う今年の海水浴のお供は出來ませんと、云つて何事も打明けたいのだけれど、今茲で云ふ時で無いと思つたら、

「はい、妾が參る事が出來ますれば、何うかお供をさして頂きたう御在ります。……」と云ふのを皆まで聞かずに、

「わッ、出來ますればとは何んの事？何か行けないやうな事があつて……」と不審の間を起し



た。

## ( 三十 )

美津代は姫の追求にますます當惑した、寧ろ眞實の事を云つて了はふか知らと思つたが、否や／＼未だ少し早い、虚言を云つては濟まないとは思つたけれど、これも時と場合ならば仕方が無いと考へた。

「いね、何も御在ませんの、上からの仰せがありますれば、美津は喜んでお供を致しますわ。けれど、若し妾に仰付けられませんでしたら致方が御在ませんもの」

「其の事なら心配無いわ、妾がお母様に然う云つて、必らずお前を連れて行くから其の意でお居よ」

あゝこんなにまで妾を信用して居て下さるのに、それを振返して行くのは寔に濟まない。だが、それも成行上仕方が無い、お姫様濟みません／＼と、心の中では手を合はせて謝して居た。

其の中に夕景になると、琴似が美津代を招いて、

「上様が然う仰有つたが、貴女今夜小川へ行つてお住でなさいよ。姫様の方の御用はまた鶴さんにでも爲ますから」と云ふ。

扱ては既う彼の事を琴似さんにまで話されたのかと思ふと、またしても顔を赧らめずには居られなかつた。

聽て食事を了いたので、美津代は琴似に挨拶して邸を出た。而して通用門を通つて往來に出ると其處で外から歸つて来た恒雄に出會つた。

「お歸りなさいまし」と例のやうに口では云つたが、何んだか今日は極りが悪かつた。其の癖先方では相も變らぬ調子で、

「はア」と軽く會釋したのみ。

美津代は二三步行過ぎて、振返つて其の後姿を見た。目には黒い校服が映つたまでゝあつたが、何故か俄かに胸の躍るを覺れた。

三河臺町の阪を一直線に下つて、今井町の通りに差寛ると、思掛なき、右側の唐物商から子供を連れて西野先生が出て來られた。



「おや」と云ひながら其の前に立止ると、

「お達者ですか。何方へ」と何日もながら愛想が好い。

「はい、一寸氷川町へ……」

「あ、然うですか。此間小野さんが一寸見ねましてね、貴女の事に就いてお話が御在りましたよ」

「わゝッ、妾の事とは……どんな事で御在ますか」と其の概畧は推しながらも尋ねて見た。

「いわ、別にこれと云つて纏つた事では無いので、只だ種々な話がありましたのよ。……最う妾等歸りますから、チト寄つてお往でなさいまし」と話を外らして了つた。

「有難う御在ます。何れ近々に伺ひますが、只今急ぎますから失禮いたします」と云つて別れた。

琴似さんが此間行つたとは初めて耳にした。何日も行つた時には歸つてから其話があるのに今回は少しも其の事が無い。それはばかりか、何時西野へ行つたのか其の氣振さへ見せないとは如何した事であらう。それに只今の話の模様では何事か妾の話があつたやうだが、若しや今の事では無からう。……否や、それには未だ早いやうだ。何も妾の話があつたとて必らずそれと

は限らない。世話人同士で妾の噂をするのは當然だから矢張彼の人の云はれる通りそんな纏つた話では無かつたのだらうと思つた。

程なく氷川町に來た。もう我家に等しい小川方の格子戸を潜つて、

「また來ましたよ」と取次も待たないで登つて來ると、

「本當だね貴女不可ませんよ。遂ひ此間來たぢやありませんか」と隅江が笑つて迎へた。

(三十一)

「はゝゝ、お母さんに叱られて怖いわね」

「あゝ、此のお母さんは若くても嚴格いから、怖いですよ」と互ひに串戯口を利きながら、例の書齋に坐つた。

「隅江さん、今夜はチト相談があつて來たのよ」と稍や改まつて云ふ。

「何んですか、相談と云ふのは？、然う固くならないでも好いでせう、もつと打解けなさいよ」と笑を含んで居る。

「自分でこんな事を云ふのは、何うも極りが悪いわ」と含羞んで居る。



「何んだね、然う言悪い事は。……あ、解つた、お芽出度い事なんでせう」  
斯う先を超されたので、美津代はますます「言悪くなつて来た。」

「まア、貴女如何して知つて居て」

「全く然うなんですか」と確める。

「はア」と極りの悪い事夥しい。

「多分其の位の事だらうと思つて云つたら、それが的中つたのよ」

「然うでせうね。……で無い事には、貴女に分りさうな事が無いと思つたの」

「處が、日外彼の小野さんからの話だつたさうですが、相當な人があつたら持たしても宜いかとお尋ねでしたから、妾や當人はチト希望のある身で、持たぬとは云ひますまいけれど、何うせ晚かれ早かれ持たねばならないものだから好い人であつたら無論持たせたいが、併し當人がそれを承諾するか如何かと云つて置いたのですわ」

「はア、然うすると、只今の西野の話が然うだと思つたので、

「それは矢張り彼西野さんからですか」と訊いた。

「然う、何日頃でした。それは」

「遂ひ此間でしたよ。彼の大國の話が直ぐそれに續いて起つたのだから」

美津代はいよく「以てそれに違ひ無いと思つた。」

「で、相手の人はどんなのですか」と隅江が尋ねた。

「其の人と云ふのは、矢張邸に居て高等工業に通つて居たのでしたが、今回卒業して、郷里札幌の製麻會社の技師に成るんです。それ先達て邸へ歸つた時貴女へ上げた手紙の中に書いておいた彼の人よ」

「あ、彼の親切な人ですね。本當の世話焼は誰なんです」

「奥方ですわ」

「矢張ね」と何んだかこれも既に知つて居るやうな模様なので、

「何も角も分つて居て」と小川の顔を見る。

「いね、分つて居ると云ふほどでも無い、が、西野さんが極く心安い仲だから、種々と小川さんに訊いた事を妾に話したよ、だから今貴女の話聞いて思當る事があるわ」

「ぢやア詳しく話さなくても宜いわね、最う大抵分つて居るのだから」

「わ、只だ肝腎の貴女に十分の見込さへありや、それで宜いぢやありませんか」と最う了解



が早い。

「妾は若し貴女に異議がありやしないかとそれを心配して居ましたの」

「いね、妾は未だ其の人に逢つた事は無いけれど、是迄の話で大抵は推察して居ますよ。これが、誰も知らぬ未だ初めての人ならば、そりや能く調べない事には可ないが、何んと云つても貴女が熱く知つてる上に媒介が媒介だから間違は無いわね。只だ夫婦になつてから旨く行くかないかは、お互ひの考へに在る事だから、それさへ好けりや好いのよ」

「妾も心配なのは其の事で殊に姑が繼母ださうなからね。……併し、次男だから別居すりや宜いわね。……それよりも妾や懐しい北海道に行けるので、それが何よりも嬉しいわ」と此の歡びには何事も打消されて了ふ、隅江もこれには頗る賛成であつた。

(三十一)

豊平家にては更に人を以て小川方へ申込むと同時に、月寒なる恒雄の實家へも掛合ひ、双方の承諾を得たので、次ぎには表面の媒介人が選ばれた。而してこれが結婚式を東京で擧げる事

になつた。

これを聞いて美津代を知るほどの人は皆喜んだが、其の中で、只た一人の悲しむ者があつたそれは他でも無い桃代姫。

「美津、お前はお嫁に行くつてね」

「おや、貴嬢お聞きになりましたして御座ますか」

「あ、聞いてよ。今度は前回のやうに最う歸つて來ないわね」

「姫様……」と云つた限り後の句が續けない。

「それに、遠い北海道へ行つて了ふのなもの」

「姫様、北海道へ参りましたとて美津は毎年一度は上京してお邸へ伺ひます」

「そんな事云つたとて、家を持つて嬰兒でも出來ては、それも駄目だわ」

「いね、大抵大丈夫で御座ます」

「まあ然う無理を仕ないでも宜いから、時々手紙を送つてお呉れ、當方からも出すからね。而して年に一度は必らず寫眞の交換を忘れないやうに。いゝかね」

「はい、交換なごゝ仰有つては恐入ります。妾の方から屹度差上げますから、姫様の方からも



下さいますやうに」

「あゝ間違無く送るわ。……寫真と云や日外見せた稻毛の寫真ね、あれを復寫して二枚進げよ。斯うなりや好紀念品だから」

「然うで御座ますか。それでは姫様、是非頂かして下さいまし。それで無くてさい一枚欲しいものだと、話し合つた事のある位ですからね。あんな好い紀念品が、復とあるもんぢや御座ません」と云つて喜ぶ。

「それでは明日直ぐに寫真屋へ遣つて、早く製らせませう。若しや妾が忘れてもしては可ないから、お前覺れて居てお呉れよ」

美津代はこれに越した紀念品は無いので、嬉しくて堪らないのみならず、これを彼の人に知らしたなら、同じく歡ぶ事であらうと思つた。

また此の事が程なく邸中へ傳はつたので、朋輩のお鶴が、

「まア美津代さんは宜いわねわ。あんな確乎した旦那様を持つて、今に奥様々々と呼ばれるんだもの、貴女は果報者よ。ホンに妾等は羨ましいわ」と真底から慶びの言葉を發した。

次に例の琴似は、其の親元たる小川が未だ年齢が若いから、万事の注意が如何と思つたの

で、

「美津さん、これが妾の小言のお終ひだから、可嫌でも能く聞いて置きなさいよ……」

とお嫁になつてからの心得を、淳々として説いて聞かせた。差向きこれが母親の格で。併し親としては、世間普通の甘い親では無くして、却々に嚴格な親であつた。

其の中に恒雄が學校を優等で卒業した。子爵からはこれが褒美と稱して、新調の禮服を下さつた。それと同時に美津代の衣裳其の他の調度も悉皆整へ、奥方はじめ姫君からも數多の賜物があつて、最うこれで結婚の準備は残らず出来た。けれども、式に列すべき男方の身内が未だ來ないので、日取等を定める事が出来ない、これが爲め當の本人同士は素より、關係者一同が首を長くして待つて居ると、稍く出て來たのは、恒雄の父直恒であつた。而も悴の晴衣まで携へて。

(三十三)

直恒は後備の陸軍佐官で、六十餘歳の老人である。頭髮も髭も眞白であるが、赭面の肥満し



た却々壯健なものだ。沈黙で傲然と構へて居る様は、恒雄と酷似て居るが、内心に温かな柔味はあるか如何だか、其の點は容易に知る事が出来ぬ。

美津代は奥方の紹介で初めて挨拶したが、直恒は何も言はないで、只だ一寸軽く叩頭したばかり、而して疑乎と暫くの間見詰めて居られたので、美津代は實に切ない思ひをした、これが今から自分のお父さんとなつて、此の他に便りの無い身を感れんで下さるか如何かとそれが氣遣はしくてならなかつた。

豊平家では、直恒が旅宿に就くと云つたのを此の極近き將來に於いて一家の人となるべき未來の嫁との間を成可く親しませやうとて、強めて邸に泊らす事にされた、それと同時に美津代は令嬢附をお鶴と交代させられて半ばお客分のやうになり、只だ時々直恒の居る席へ出されるので一方ならず氣を揉んだ。

到着の翌日、表大廣間に於いて殿・奥方、直恒、琴似、それに小川が態々招かれて五人で暫く相談があつたが、それに依つていよく擧式の日も極り場所も決定した。

だが、それには未二三日の餘裕がある、此の間を利用して子爵は遠來の珍客を款待す爲自動車を驅て各所の見物に赴かれる、歸つては毎夜酒が出て酔ふとお互に在任當時の話が始まる。

其處へ美津代が合間々々の給仕に出て居て居ると客はこれも主人を閣下々々と呼で居ると主人は客に向て貴下々々と云はれる。これを見ても殿が直恒に對して、相當の敬意を表されて居る事が分つた。

直恒は酔ふと平素の沈黙に似ず、頗る快濶に話をするが、子爵に對して多少尊敬の意を拂つて居る故か、更に打解けた事が無い。それとも此の將來の花嫁の前に於いて、威嚴を失ふやうな事があつてはその心遣ひからしての事か。何んにしても、美津代は此の舅たるべき人の意を量り兼ねて、密かに心を惱まして居た。

すると、今迄世間話に耽つて居られた子爵が、突然、「圓山さん、貴下この美津代が事は、直隆君からお聞きちやツたいらうが、素性は立派でも不幸な身の上でな、随分と目を掛けて遣つて貰たいものぢやテ」

「は、閣下承知して居ります。此方からも目を掛けるであります、先方からも服従して貰はんと可ません」と頗る眞面目で答へた。

「そりやお言葉までも無い、子は親に従ふのが道ぢやよ」

「然様であります、世間には舅始に服さぬ嫁が往々ありますので、若しそんな眞似でもされ



てはなりませんからな、閣下」

「否や、其の心配は無用ぢや。美津に限つてそんな事は御座らんぞ」

「私の方でも其の意で貰ふ事に致したのであります。……が、只今申したのは萬一の警戒までに過ぎないので……」

「はッはッ、成程な、貴下は軍人ぢやから却々警戒深いちやよ。……だが、敵が降服したのぢや無いから然う警戒には及ばん。はッはッはッ」と大聲に笑ふ直恒も仕方無しにと云つた調子で、

「はッはッはッ」と笑ふのであつた。傍に在つた美津代は此の様にますます、將來が案じられて來た。

(三十四)

聽て選まれた吉日は巡つて來た。場所は遂ひ近くの材木町なる、本當の縁結びの神様、出雲大社の分祠に於いて行ふ事となつた。

待構けた花婿花嫁は、今日を晴れと着飾つて、子爵邸から馬車に同乗して式場に向つた。

式は崇高尊嚴なる神前に於いて正装せる神官の手に依つて、嚴に執行はれた。列席者は子爵夫妻に、男の方より直恒、女の方には隅江、それに琴似と媒介人の六人であつた。

型の如く式を了ると、一同は其の場より豫て設けられた宴會場にと進んだ。

會場は星ヶ岡茶寮で、一行の馳付けた時は、既に招待客數十名の先着者があつて、新夫婦の到るを待つて居た。

乃で、媒介人は新婦新郎を案内して席に出で、先づ會衆に紹介した、ついで新夫恒雄が挨拶をする、次ぎに來賓總代、並びに友人總代の祝辭があつて宴に移つた。

寮は三味線などの淫聲を一切嚴禁して居るので陽氣な宴ではなかつたが、靜肅にして誠意覃めた會であつた。

此の披露の宴を了ると、新夫婦は直ちに相携へて札幌へ行く筈で、既に其の準備をして居たところが、同じく此の會に出席して居た東京の本社の支配人が、恒雄を別室に誘ふて、

「貴君の卒業の事を云つて遣つたら彼方から斯う云つて來ました」と衣囊から取り出した一葉の電報を示した。

見るとそれは札幌の支社から發した電報で當分本社詰との命である。



「然うですか、それぢや一二年は當方に居るんでせうね」と訊くと、支配人は薫の高い葉巻を燻らしながら、

「否や、貴君は技術の人だから無論彼方ですが近い中に外國へ注文した機械が着く筈ですからその来るまで此方に居て貰ふのでせうよ。此當分と云ふ意味は多分それを合で居事と思ふです。で無くては、殊更に當分なごうは云つて來ませんからね。……何んにしろ二三日経てば手紙が來ますから、明確に分ります」と云ふのであつた。

恒雄は取敢へず此の事を子爵と父の二人に告げて、出發の豫定を變更し、新妻と共に一先づ邸内の琴似の宅へと引揚げた。

「お父さん、尊父のお供をして歸らうと思つて居たに、到底出來ないから、お氣の毒でも一人で歸つて下さいよ」

「うむ、これぢや不可な。私の事はいいが、お前達や何處か住居を定めにやならんぞ」

「然うです。當分の事なら構はんから、此處に居れと云はれますけれど、孰位かゝるか分らんに、何日までも厄介になつて居られませんからね」

「然うぢやども。會社は何處だつたかな」

「本社は品川です」

「む、然う、何處か彼方の便宜な方へ移つたら宜からう」

「明日會社へ行つて熟く訊いて見ませう、然うしたら略ぼ熟位居ると云ふ見當が付きますからそれに據つて極める事にします。若し餘り短い事でしたら、一戸持つのは不經濟だから、何家か間借でも仕ませう。それとも四五ヶ月も居るやうなら、一戸借りても宜いですが……」

「其の考へが至極宜からう。お前も當方に居れば是れから一戸の主んぢやから何角に氣を付けて、無駄の無いやうにせんと不可ぞ」と茲に父子の相談が纏つて、直恒は邸へ歸つた。

(三十五)

翌朝、恒雄は初めての妻に初めて送られて、初めて出勤した。何も角も初めて盡くしてお芽出度い。眞に今日から新生活に入つたのである。

夫を送り出した美津代は、跡片付を濟まして邸へと伺つた。逢ふ昨日までの朋輩が云ひ合はしたやうに誰も彼も、



「お芽出度う」

「お芽出度う」と、是迄のやうに「お早う」と云ふ者は一人も無い、中には顔を見て例にない笑を浮べたのさへあつた。

次に琴似に逢つて頃日來の骨折の禮を云ふと、又しても人の妻としての爲すべき事柄を諄々として説いて聞かされた。

今回は奥方の許へ伺つてお禮を述べると。

「お、早いね、最う恒雄さんは出勤されましたか、今日から御出勤のやうに聞いたが然う何も急がなくても宜いのに婚禮の當座なもの、三日や四日は行かなくても誰が何んとも云ひますものか」

「でも勤務で御在ますから、然う疎かにしてはなりませんね」

「二人とも堅いもの同士の寄合だからそんな事を云つてゐる。新婚の快樂は二度と得られないから、十分に味はつて置くが好い」

「有難う存じます」とついで表書齋に子爵を訪はうとすると殿は恰度其處へ成られた。

「おう、美津は最う來て居るか、大層早いのが、圓山は今日から出勤するてい事ちやツたが：

「うむ既う出勤した。それは結構ちや何んでも勉強せん事にや不可からの、殊に若い時にはウンと働いて置くちやよ」

全然奥方とは反對な事を云はれる、御夫婦でも斯うも意見が違ふものかと思ひながら美津代は、

「恒雄も殿様と同じやうな考へを有つて居るやうで御座ます」と云つて一寸奥方の様子を窺ふと稍や不快な氣色である。

「む、然うちやらう、平素乃公が薰陶して置いたからの、然う無うては副はん美津も其の意で傍から勵まして遣れ」との仰せだ。奥方はますます不與な顔、

此の場合、美津代は如何取締つて宜いやら、一寸其の方法に困つたが。やうやくの事に、

「妾は當分の中成可く家に居て貰ひたいので御在ます」と双方の意を副ふたやうな事を云ふと、殿は、

「然うちやく、其の意で居れい」と仰せられる、奥方も如何やら氣嫌が直つた様子で笑つて居られる。  
最後に別室に居る直恒の前へ出て、



「お父様お早う御在ます、昨日はお疲れましたでせう」と、挨拶すると、一寸此方を見て、

「あ、お早う、恒雄は最う行つたかな」と訊く。

「はい、先刻に参りまして御在ます。あの早く行かないと最初から怠惰者のやうに思はれてはならないからと申しましてお邸はじめ尊父へも御挨拶もせずに出掛けまして御在ます」「うむ然うか」と木で鼻を拵つたやう。

「お退屈でせうから、何か持つて参りませうか。お茶でも如何さまで……」と尋ねた。

「否や、宜しい、他家に居つて然う勝手も云へんからのう」と苦い顔をする。美津代は初めての御機嫌伺を不首尾で退いた。

( 三十六 )

美津代は邸へ行つて、今日ほど極りの悪い思ひをした事は無い。それでも未だ彼の無遠慮なお鶴と、桃代姫が居られなかつたから、其の思ひが少なくて濟んだと喜んで居ると、軀て二人は

學校から歸つて来て逆襲した。

「奥さん、奥さん、圓山の奥さんお居ですすか」と云つて、入つて来たのはお鶴。ついで桃代姫。

「おや、お姫様お來であそばせ」と美津代が起つて迎へた。

「お前今朝來たつてね。妾やお前が北海道へ當分行かないでも宜いと聞いて、嬉しかったわ」

「妾も嬉しう御在ました」と跋を合はせるお鶴は笑ひながら美津代の顔を見て、

「昨日は羞しかつたでせう、大勢の前へ引出されて、可厭だわね」と云ふ此の女ですらと美津代は思つた。

「然うよ。あんな極りの悪い思ひをした事は是迄に無いの……貴女も今に爲るんだわ」

「何に、そんな事が耻かしくて如何するの」と令嬢か横から、

「妾も小供の折に、人が然う云ふのを聽いて居て可訝やうに思つてゐましたが、實際自分の身に成つて来て初めて思ひ知りました。然う有仰る御姫様も今に成程と思ひあそばすやうに成りますよ」と云ふとそれをお鶴が引取つて、

「可嫌だわね。誰も一度は其の思ひを爲にやならないのだから」



これで此の話が一段落を告げると、直ぐにまた他の事が湧く。  
「それぢや當分此方にお居でなのなら、何處かへ家を持つ」とお鶴が問出した。すると、令嬢が口を挿んで、

「いね、當方に居るのなら何處へも行かないで、邸の内に居でなね。然うすると何時でも往つたり來たりする事が出来るから、それが宜いわ」

「有難う御在ます。お奥でも然う仰有つて下さいますが、如何なりますか、圓山が歸つて來た摸様に依りまして……」

「然うだわね、會社の都合次第で……」とお鶴が合槌を打つ。

此の話半ばへ、恒雄が歸つて來た。妻の美津代は急いで出迎へる。二人も其の後に從いて、  
「お歸りなさいまし」

「お歸り」

「旦那様、お歸りあそばせ」これはお鶴が串戯に。

「や、お揃ひですね」

「貴君が歸つて來るのを待つて居たの」

「嘘で御在ますよ」

「妾は本當に待つてたのですわ」

「あら、お鶴さんまでが……」と美津代は苛めるやうに云ふ。

「それは、ようこそ迎へに來て下さつた。美津代、御馳走をウンとしてお上げなさい。待遇が悪いと、其處等中觸れて歩かれるぞ。お歸りの時には別仕立の瀛車で送らせませすから」と滅多に云はぬ戯言に、三人はキヤツキヤと云つて笑ひ出した。

「圓山さんの串戯は、妾はじめて聞いたわ」

「鶴もで御在ます」

「あんな真面目腐つた顔して、能く云へますわね」と美津代までが呆れて居た。

すると美津代は氣が付いて、留守中疊んで置いた着物を一襲取出して、

「さ、お召をお着換へなさいまし」と傍に寄つて洋服の釦を脱し出した。

「お、お姫様、もう歸りませうよ」

「まあ宜いぢやありませんか」

「もつとお遊びなさい」



「また來ますわ」と二人は出て行つた。

(三十七)

「今日は如何で御在ました」と美津代は茶を侷めながら夫に云つた。

恒雄は妻が出て呉れた座布團に寛潤と坐つて、

「あ、初めてだから各部を挨拶に廻つた丈で、何んの用も無かつた。……今後とても當方に居ては恐らく左程の用はあるまい。本社とは云へ便宜上名義丈けの事だからね。其點へ行くと札幌の方は支社だけれど首脳は彼方に在るから實に素晴らしいものだよ」と云つて茶を吞干した。

「然うで御在ませうね。日外會社の重役の立花さんがお來でになつて殿様とお話になつて居ましたが却々大層な模様でした。……ちやア吾郎の御用は其の外國から來る器械が主要ですね」

「まア然うだね。此方で受取の際検査をしくちやならないので僕が居なけりや彼方から誰か技師が來る筈ださうなが幸ひ僕が入る事になつて此方に居るものだから、それ迄本社に置いて

販路の模様等を見せたら將來利益になるだらうと云ふので、旁々此方に置かれるのださうな」

「では、其の器械は何日頃着きますの。大抵分つたので御在ますか」

「然様」昨日倫敦を積出したと云ふ通知があつたさうだから、まア來月の下旬でないかと横濱に着かない。尤もそれは汽船が順當についての勘定で若し途中暴風でもしたらもつと遅れるし、それに横濱で陸揚げしたり税關の手を経たりすると如何しても再來月に掛るよ」

「時には汽船が豫定よりも早く着く事もあるでせうね」と尋ねた。

「そりや無事もないが、そんな事は滅多と無いね。殊に當節は海上の暴れる時期だから」

「然うすると、まだ全二月ありますね」

「然うだ」

「其の位の事なら、何家かの二階でも借りる事にしませう。一戸を借りては種々な道具が要りますから」

「む、それが宜からう。然う物を買つても出立時には置いて行かなきゃならんからね」

「然うで御在ますよ。賣らうと云つたつて二束三文にしきや買ひませんからね。惜しいですわ」



其處へ直恒は、忤が歸つたと聞いてやつて来た。

「おう、歸つたか、今日はホンの顔出しばかりだったちやらうな」

「然うでした」

「彼の、昨日来て居つた支配人ちうのは以前本社……否や、支社に居つた事のある男かな」

「はい、何んでも一昨年あたり居つたやうな話です」

「む、然うか。そりて私を知らん哩」

「尊父を知つて居るのは、餘程前からの人で無い事には……」

「然うぢや、聯隊長時代には、皆がよく来たものぢやよ」

「そんな人は、目下重役以外には餘りありませんまい」

「うむ然うぢや。大抵新参者ばかりで、要部に立つて居る人は知らんのが多い」

「お父さん、それも其の道理です、既に尊父の忤が入つて是れから働かうと云ふのですからね」

「はッはッはッ」と初めて直恒は大笑した。

それに伴つて、傍の二人も笑ひを禁じ得なかつた。

「時に此方に居るのは孰位かな。少しは模様が分つたのか」と思出したやうに尋ねた。

(三十八)

恒雄は父の間に對して先に妻に話したと同じ答をした。直恒は聞いて失望の色を見はし、

「ぢや私は歸る」と投出すやうに云つた。其の意は忤が家を借りたならば暫くそれへ滞在して緩るゝと遊んで行かうと思つて居たのに、其の的が全然外れたので落膽して了つた。

「まア宜いです。お父さんも切角来た序だから今少しお居でなさい日曜日にでもなれば何處かへ御案内をしますから」と云ふ恒雄の尾に跟いて、

「本當で御在ますわね、如何に何んでも此の儘では餘り呆氣ないぢやありませんか、お父様今暫く御逗留なさいませよ。夜分にでも何か珍しい所へお供を致しますからね」と美津代も引留めやうとした。

「否や、お前達の居所も極らんに、私までは邪魔をして居つてもならん。それに然う何日までも遊んで居られんから私は歸る」



恒雄は父の意中を略ぼ推察したので、

「家が出来ればお居でなさるでせう。……それなら早く借受けます」

「借りると云ふたどて僅か二月位の事ぢやらう。それで一戸持たうと云のか」

「いわ、間借にして置かうと思ひます。何處か彼の附近の寺かまたは目黒へ行くと植木屋で離座敷を借すのがあるさうですから然ういふ所を借りませう」

「む、然う云ふ所なら私も行けるが普通の民家では到底居られん」

「然うですとも。宜いです明日會社からの歸りに目黒の方へ廻つて搜して來ます」

「然う極れば成可く早い宜う御在ますわね。お父様も御不自由でせうけれど氣兼ねの無い所にお居でになつた方が宜う御在ませう」

「うむ、然うぢや、邸に居れば結構ぢやけれど、餘り款待されるで氣切無いらな。若し然うでもなつたら、私も暫く居つて行かう」

「然うなさいましょ。屹度好い所が見付かりますから」

直恒はやうやく滞在する氣になつた。而して成可くならば庭の廣々とした、樹木の中に見え隠れして居るやうな所があつて欲しいと思つた。

其の夜、恒雄は邸へ伺つて、子爵夫妻に見え、特に頃日來自分に致された厚意に對して、心からなる感謝の意を表した。

次ぎに日頃世話になつた家従の許に行くど、家扶の山中が、

「おう、圓山君お芽出度う。君の御臺所は如何あそばされて御座るかな。一度御慶賀に上らうとは思つて居るが、新婚の快樂を殺いでもならんと思ふて、故意と差控へて居るところで……」

「や、それは近頃稀らしい御殊勝な事で……何にも然う御遠慮には及ばんからお入來なさい愚妻が手前で貴下のお好きなお茶でも差上げますのに」

「いや、然うお惚氣交りに中られては堪らん。殊に其の様な肩の張る事は嫌ひだから、もつと打寛いで陽氣な所を願ひたいものだ」

「成程、貴下の云はれる其の陽氣な所とは、那邊の事で御座るな」

「されば、ズット若返つて騒いで見たいので、田町あたりか何んなら道玄阪でも辛抱して進せ

る。」「それは年寄の冷水、本氣の沙汰では御座らんぞ」

「うはッはッはッはア」



## (三十九)

翌日は土曜日なので、令嬢は午前限りで學校から歸つて來られ、突然にも晝餐に美津代を呼ぶとの仰せ。

旨を長まつて、迎へに行つたのがお鶴である。

「美津代さん、お姫様のお召で、御膳を一緒にしたいと仰有いますよ」

「然う。ちやア直ぐ参りますわ」と早速連立つて姫の居室に行つた。

令嬢は待構へて居て、

「一人で食べるよりは、多數で一緒に喫べた方が、どんなに美味か分らないわね」

「然うで御在ますよ。是迄お邸で大勢で食べて居たのに、急に一人で喫べますと淋しくて一寸も美味くは御在ませんの」

「毎日此方へ來てお喫べよ」

「お鶴さん、貴女も此方でお相伴なさいな。宜いでせう」

有繫のお鶴も他の手前如何あらうかと、これが返事に躊躇して居ると、  
「然うだわ、一人も二人も同じ事よ。今妾が然う云ふからお前も一緒に喫りな」と姫は云つた。

其處へ膳は運ばれる桃代が然う云たので、茲に三人は一緒に食事をした。

食後三人は種々な雑談に耽つて、更に時の移るを知らなかつた。

美津代は不圖氣が付いて見ると、最う夫が歸つて來るに間も無い時分である。

「おや、大層長遊びを致しましたわ。今に恒雄が歸つて参りますから、お暇しませう」と立上らうとすると、姫はそれを遮つて、

「まあ宜い事よ、圓山さんが歸つて來たつて宜いちやないか。妾が然う云ひますわ、無理に引止めて置いたんだつて……」

「そんな事にまで姫様を煩はしては勿躰なう御在ますわ」

「だつてねわ、如何に何んでもそれでは濟まないわ」とお鶴が賛同した。

「ちやアお茶を一杯飲んでお歸りよ」

「それにも及びませんわ」



「まあ美津代さん、それだけは宜いでせう。切角お姫様が御親切に仰有るから」  
それでもとは言兼ねて、美津代はまた腰を据わせた。

「美津、今夜はまた宵張りをするから、遊びにお来でなね。圓山さんに然う云つて」

「お姫様、お察しの無い、そんな事仰有つては可ませんよ。未だ新婚當座ぢやありませんか」

「アレお鶴さん、憎らしいのね、そんな事云つて。覺わてお居でなさいよ」

「おほ、おほ、」

「あ、然うか」

「然うかなんツて、お姫様も可嫌で御在ますよ」

「ぢや明日何處かへ遊びに行かうぢやないか。圓山さんも圓山さんのお父さんも一緒にね」

「然うで御座ますね。……」と考へて居る。

お鶴は焦躁がつて、

「宜いちやありませんか、明日は日曜だから會社の方もお休みでせう」

「然うでせうよ」

「それなら貴女、些とは保養もしない事には、然う家にはばかり引込んで居ては毒ですよ」

「だつて、妾が極める譯には行かないのですもの。圓山が歸つたら話して見ませうよ」  
其の内に茶も了つて美津代は令嬢の許を辭した。  
歸つて來ると、只た一步の違ひだが、恒雄は先に歸つて居て、今靴を脱いだ處であつた。

(四十)

直恒は氣になると見えて、其の夜また悴の許へやつて來た。恒雄は見るより、

「お父さん、今日は何處行でした」と尋ねた。

「うむ、閣下の御案内で瀧の川へ行つて來た。イヤ如何も何處も彼處も電車も敷けて、東京は便利になつたのう。有繁は日本の帝都ぢや」と感心する。

「今日は電車でしたか」

「うむ、閣下と出る時は何時も自働車ぢや。あれも軍用には未だ感心しないが、平時の乗用には輕快で宜い」

「お父さんには未だ飛行機の飛ぶのを見せませんね。一度お目に掛けたいもんだが……あ、然



うく。今日から所澤で飛んで居るんだ」  
 「其の所澤とかへ閣下が明日御案内下さる筈ぢや。閣下も未だ一度も飛行を見た事が無いと仰せられる」

「然うでせう。初めは大層期待して居られて代々本の練兵場へは度々お出でになつたが、彼處では一度も上つた事が無いもんだから、以來飛行機は詰らんものとして、一寸も御覧になつた事が無いのです。それでは明日お出でになるのですね」

「然うぢや」

「彼處へ行くと種々な飛行機があつて、加之に現下飛行船も揚て居るから間が宜いと、飛行界の實況を一時に見る事が出来ます」

「お前は行つた事があるか」

「否や、所澤へは行つた事はありません」

「其の他は初めて目黒で飛んだマウスを始めとして、カーチス式の水陸飛行など、残らず行つて見ました」

「お、目黒のそれ、家は捜して来たかの」と俄かに思出したやうに云ふ

「は、捜して来ました」

「如何ぢや、適当な家があつたか」

「恰度好い家がありました。矢張植木屋の離座敷で、六疊に四疊の二室ですが押入等の工合も好く出来て居て、井戸も遂ひ傍だから住むには好いです」

「む、ぢや庭も廣からうの」

「然うですね、廣いと云つたつて然程な事は無いが、何んにしろ周邊一面樹木に蔽はれて居て家の中も真蒼です」

「それは結構ぢや。而てお前の出入には如何ぢやの」

「はい、停車場に餘り遠くぢや不便ですから、目黒驛を十町以内の範圍で捜したので、不動の手前目黒川に沿ふた所です」

「ほう、其の様な方針で捜したのか。それぢや近くて好都合ぢや。……それで約定をして来たのぢやらうな」

「既う手金まで置いて来ました」

「それで、何日行く意ぢや」



「幸ひ日曜ですから、明日行かうと思ひます」  
 「それは火急ぢや。では幾許何んでも食器だけは買はねばならん」  
 「然うです。これから夫婦で買ひに出掛けませうよ」  
 「此の様な遠くから運ばんでも、先方の近くでも買へるぢやらう」  
 「そりやお父さん買へますが、新開地の物となると品が粗末で、而も値が高いから駄目です」  
 「ふむ、成程、其の様な事もあるかの」  
 「ね、有りますとも、此處等とは非常な違ひです」  
 直恒は今になつて悴から一ツの智識を興へられた。

(四十一)

翌日になると、直恒は早朝から子爵に伴はれて所澤へと向つた。昨夜既に引越しの旨を父から子爵夫妻に申上げて置いて置いたが、恒雄は更に今朝其の趣を奥方に告げて、午前中に邸を引拂ふ事にした。

美津代は暇乞の爲め、更めて邸へ行くこと、奥方が別れを惜しんで、  
 「もう疾に北海道へ行つた筈のが、今少し離れた郡部へ移るのだから、それを思ふと斷念が付きさうなものだけぞ、何んだた別れるのが可厭ぢやらう」  
 「然様で御在ます。幾許近い所へ行きますにしても、お邸を出ますのは寔に殘惜しう御在ます」  
 「まあ宜い。一時に遠い所へ行つて仕舞はずに、だんごと離れて行くのだから、其の方が幾許か増ぢやらう……」  
 話半ばへ桃代姫が出て來られた。其の顔を見るより奥方は、  
 「お、姫も來たかや。美津が行くと云ふが、特別にお前は別れるのを厭ふぢやらうのう」  
 「何にお母様、近い所だから始終往つたり來たりする事が出來ますわ。……妾も今日不動様へお参りを兼ねて鶴と一緒に往つて來ませうよ。宜いのですか」とこれは案外、別に氣にも掛けない様子。  
 「ね、美津、今日は皆なで何處かへ行かうと思つて居たわね。それにお前が引越するんだもの。目黒なら恰度宜いから、遊びがてら送つて行ませうよ」



「送ると仰有つては姫様、美津は御辭退致します。勿体なう御在ますから」

「ぢや送つて行かないの。不動様へ参詣して序に寄るから宜いでせう」

「わゝ、何うぞお立寄あそばせ。お待ち申して居ります」と語る者も笑つて居れば、聴く者も笑つて居る。

令嬢の歸途は恒雄が邸まで送つて來ると云ふので、桃代は早速行く仕度に取掛る。恒雄夫婦も昨夜から夫れく其の用意をして居る事とて、間もなく準備が出来た。乃で荷物はお抱ねの車夫が運ぶ事になつて、新夫婦は姫主従と共に電車に乗つて青山に出で、澁谷から更に山の手線に乗替へ、目黒驛に下車して、それより徒歩で家に到着した。

「此所だ」と叫んで、恒雄は先に立つて柴折戸を入つた。ついでに姫、美津代とお鶴は互ひに譲合つた末、お鶴が負けて先に入る。美津代は殿りで後締りが當然の役。

「おや、妾の部屋と同じよ」

成程、云はれて見ると全く然うである。

「加之に離座敷までが似てますわ」とお鶴が和した。

「妾、お邸に居るやうな氣になつて居ますわ。偶然ですのに、能く斯うも似た所があつたものですねわ」

「さア、僕も只今姫様に云はれるまで氣が付かんで居た」

一同が話して居ると、敏くも様子を見て取つた家主の主婦は、直ぐと上等の坐褥を持つて來て、お茶さへ運んだ。それを美津代が庭先に捉へて、何やら細語くと、主婦は呑込んだ調子で去つた。

暫く經つと、不動前の料理店から馳走が運ばれて、一同は晝食を済ました。食後四人は打連立て不動へ参詣した。

(四十二)

不動への参詣も参詣だが、それよりも清鮮の氣に満ちた新緑の中を辿つて、彼方此方と逍遙するの何よりの望でもあり、且つ楽しみであつたのだ。斯くして數時間を郊外に送つて歸つて見ると、車夫の久造は何時しか來て居た、既に荷物は夫れくの場所に片付け、今や灰を造



つて火鉢に入れて居る最中であつた。

「やア久さん、御苦勞であつたね」

「旦那、荷物をいゝ加減な所へやつて置きましたから、後で見直して下さいまし」

「好しくまア一服したが宜い、然う働いてばかり居ては、躰が續かんぞ」

「へい、旦那のやうに云つて下さると氣はツかしても宜うがすが、邸の三太夫みたいに朝起きるとから、夜寝るまでガミ〜云つて、立續けに働かさうとしたつて、然うは働けるもんぢやがアせんわね旦那」

「まア不平を起すな、今に君等の喜ぶ時代も来るだらうよ、斯うして姫様もお聞きになつて居るから」

「へ、然う思つて働いて居やしやう、また好い芽も吹いて來ませうからね」と話の中に灰も入れたつて、火鉢に雑巾掛さへもして置いた。

「まア此方へ來て一服したら宜からう」と恒雄の云ふがまゝ久造は椽先に來て腰を下した。

すると、美津代は折敷の上に二品ばかりの肴に、茶飲茶碗を載せ、片手に酒徳利を持つて來て、

「久さん、冷酒だけぞ、お茶代りに飲つて下さい。肴が何んにも無いので……」と其の前に据わした。

久造は徳利の姿を見るより顔の相好を崩して、

「いや奥さん、恐れ入りやした。俺どもア初中終兜を被り慣けて居るから、冷ッこても結構でさア」と喉を鳴らして四五杯立續けに呻つた。

其處へまた、美津代が密と幾許かの心付をしたので、久造は無言のまゝビヨ〜頭を下げ一寸頂いて直ぐさま腹掛の井へ捻込んだ。斯うして馳走にはなる、懷中は膨らむで來る、獨り久造はホク〜喜んで居る。

一方では頻りと話が乗勢むで、令嬢は輿に入つて居るが、だん〜時間が経つたので、お鶴が氣を揉出し、

「お姫様、もうお歸りあそばしては如何で御座ます」と云ふと何事にも然うと云つて従つた事の無い桃代姫は、

「何に、幾許遅くなつたぞて宜いよ。圓山さんが送つて呉れるんだから心配は無いわ」と一向に取上げさうにも無い。



「でもねわ、お邸で御心配あそばしますわ。お急立て申すやうだけど……」と美津代が口を添へた。

これには如何な令嬢も素直になつて、

「ちやア美津、また来てよ、これからチョコク／＼来るわ」

「何うぞお光來あそばせ。もう道も所もお分りで御在ますから、毎日でも来て下さいまし

「来るわ。ねわ鶴……」

「然うで御在ます。これから休日にはお供をして來ませうよ。……久造さんお前も一緒に歸るでせう」

「ね、歸りやすとも。旦那、何うせ俺が一緒に歸りやすから、貴方態々お出でなせねでも宜うがす。俺がお供をすりや大丈夫でさア」と酔つて俠の本性を顯はして來た。

「否や、そればかりなら好い序だから頼みませうが、父を連れて來にやならないから如何しても行つて來やう」と茲に恒雄は主従三人を送つて日暮方家を出た。

跡には美津代が只だ一人、留守居の淋しさをヒシと感じた。

(四十三)

昨日までは廣い邸の中に多勢と共に居たから、淋しいなどは夢にも思つた事が無かつたが今日は此の狭い家に住んで俄かに小人數となり、而も一人で留守する身になつて見ると、寂しくて堪らない。こんな事が向後屢々あるのかと思ふと、何んだか可厭な氣が起つて來た。併し考へて見ると、それは豊平家に居つた時を比較するからの事で、其の以前未だ何處へも奉公に行かなかつた頃を思へば、何んの淋しい事が有るものかと、また思ひ直して堪へて居た。

日が暮れてからは一切戸締をして、中で明朝用うべき物品を取出して居ると、突然戸の外に方つて、

「御免なさいまし」と云ふ聲がする。

「孰方ですか」と訊くと、

「はい、妾で御在ますよ」と云ふ其の聲は紛れも無い家主の主婦だ。



「あ、只今明けます」と云ひつゝ起つて戸を開いた。

「切角何か仕て居らつしやいますのに邪魔で御在ますわね」と入つて来たのは色は黒いが、  
 櫛巻の一寸垢抜のした女だ。

「さ、何うぞ此方へお上り下さい。未だ取散らして居ります」

「あの、何か御不自由な物が有つたら御遠慮は要りませんから然う仰有つて下さいまし。好い  
 物はありませんが、大抵の品は御在ますから」

「御親切に有難う御在ます。先程も御心配に預つて済みませんでした」

「奥様……」と主婦は急に改まつて、

「……今日お入来になりましたのは麻布六本木の、豊平様のお嬢様では御在ませんでしたか」  
 と尋ねた。

「然うで御在ますよ。能く御存じですね」

「彼の、荷物を持つて見えた車夫さんが印のある法被を着て居ましたから、所天が多分然うだ  
 と云て居ました」

「貴女、豊平様を御承知なんですか」と訊く。

「はい、私方の親父の代には、開拓使時分から植木の御用を仰付かつて、時々北海道へも参つ  
 たものですが、親父が歿になると共に止めました。其の折所天は未だ小僧でしたが、親父と一  
 緒に豊平様のお邸へも伺つた事があるので、それで承知して居ります。今でもお殿様にお目に  
 掛つて然う申上げたら、多分然うだつたかと仰有るだらうと云つて居ります。……今日お光来  
 になつたお方は、其の時分乳母に抱かれてお居でになつたのが、然うだらう。もうあんなにお  
 成りなすつたかと、自分の年の寄つた事も忘れましてね、大層感心して居りました」と云ふ。  
 では此の家も満更北海道に縁の無い事はない、自分の行く所は、斯うして偶然にも北海道に  
 少しでも關係のあるところを見ると、だん／＼と日頃の目的に近づいて来るのかと思はれて、  
 美津代は此家へ来たのを喜んだ。

「あ、然うですか。ちや豊平様は御承知だが、北海道へもお往でになつた事がありますか」と尋  
 ねた。

親父は年に一度位は参りましたが、所天は一度も行つた事がありません」

「然うですか、妾も遂ひ此間まで豊平様に上つて居りましたが、奥方の御媒妁で今回婚禮しまし  
 た、矢張旦那は北海道の者です」



「あ、それで製麻會社へお出でになりますのね。……ちや私共へお來でになつたのも、何角の御縁で御在ませう」

「然うですわね」と二人は淡い感慨に撲たれて居ると其處へ恒雄が父を伴ふて歸つて來た。

(四十四)

「おう、これは一寸好いの」とは直恒が屋内に入つて最初に發した言葉であつた。

「吾郎、御飯は……」

「わ、邸で招ばれたよお父さんにお酒が出て居たもんだから、私も御馳走になつて來た、お前未だらう。お喫りよ」

「はい。それよりもお父様に取つてありますから、燗ませう」

「然うか、それは氣が利いて居る」

夫婦の話を聞いて居た父は、煙草を燻ゆらしながら、  
「最う今夜は好い。邸で十分飲んで來たから」

「いや、もう醒めましたらう」

「然うでも無い」

「でも、今日は引越で御在ますもの、何も無ければ召食つて下さいまし。田舎料理で口には合ひますまいが、酒だけは邸のと同じださうに御在ます」

「お父さん、今夜からはチト寛いでお飲りなさい。私も相伴しますから」

「ちや招ばれうかい。お前御膳を食べよ、乃公等は最う喫つたのだから」

「はい、頂きます。……何うぞ尊父お熱いのを……」

「お、お前構はず御膳を食べ。此方は二人で飲むから」

「お父様はお好きか如何か知りませんが、今にお蕎麥が参ります」

「それは結構ちや、乃公は蕎麥が大好物での、戦争の時には支那から態々蕎麥粉を取寄せた位ちやよ」

「然うく、そんな事があつたですわね」

「然う好きなら、蕎麥屋は逐ひ近くに御在ますから、何時でも取ります。……ちや一寸催促に行つて参りませう」と立ち掛るを、直恒は引留めて、



「いやそれには及ばん、新聞で見ると東京は物騒ぢやから、若い女が夜中戸外へ出るの宜しく無い事ぢや。然うせんでも今に來やう、何も急ぐ事は無い」

「ぢや待ちませう。もう彼れ此れ來るでせうと思ひますが……」と其の言葉が未だ終るか了らぬに、早くも蕎麥がやつて來た。

直恒は箸を執りながら、

「東京の蕎麥は矢張り好い」

「こんな蕎麥を褒めるお父さんに、一度永阪のを食べさせたい。其の中に案内ませう」

「次週の日曜にでもねえ」と美津代が、

それから、今日見て來た飛行の話が始まつて、一方は軍事上より論ずると、他が工學上より説く、互ひに其の立場を異にして居るので、此の話は却々に賑つた、最後に直恒が、青山練兵場でも時々飛ぶと聞いて、

「月寒の練兵場でも、早く飛ばせたいものぢや」と云つた。

こんな有様で、其の夜直恒は大分量を過ぎた。従つて餘り飲めない恒雄までが赤くなつて了つた。

翌朝、恒雄は會社へ出勤した。直恒は近傍の散歩から歸つて來て、

「近くに好い川があるの。何か釣れるやうぢや」と袂から釣道具を出して仕掛の用意をする。それを見た美津代は、

「おや、そんな物を、何處でお求めになりましたか」と訊いた。

「む、其處等で賣つて居るよ」と既や竿まで買つてある。それを携へて程なく出て行つた。暫くして歸つて來た直恒は、籠が釣れると云つて大喜び。

(四十五)

直恒は好きな遊場を見つけたので、外出せぬ日は何時も竿を提げて目黒川へと釣りに行く。

それでは満足する程の獲物があるかと云ふと、何時も小指ばかりなのが四ツ五ツ。

其の後、直恒は知邊の退役軍人で、目黒から澁谷、青山、大久保方面に在るを訪ひ、楽しく遊んで歸るのを常として居たが、十日ばかりを経て遂に札幌へ歸つて了つた。

跡で美津代は氣鬱さい人が去つたので、俄かに暢々して喜んだが、それでも夫が出勤の留守



には、彼の厳格いお父様でも居て下されば、此の淋しさを紛らはず事が出来るのと思ふ事もあつた。

而して、夫が在宅の時は忘れて居るが一人になると、何日も思出すのは桃代姫と隅江との事で、もつと近ければ一寸遊びに行つて來れるが、これ程隔つて居ては然うも行かず、それに此方の都合の好い時間には、先方が孰れも學校に居る。先方の家に在る時には、此方の都合が悪くて行けない。でも、其の中で姫は一週に一度は缺かさず來られるが、隅江は然う云ふ譯に行かない。詮方なさに手紙の往復で僅に此の思ひを醫して居た。處が一日突然小川が訪ねて來た。

「おやまア能く來られたわね」と美津代は思掛なき此の訪問に驚いた。

「疾から來やうと思つて居ても、却々來られないのよ。……今日は授業法の視察で、此方面へ出張したから、一寸其の暇を偷んで立寄つたのだわ」

「よく寄つて下すつたのね。妾も行き度くて、單獨で行かれなきや夫婦で往かうと思つて、此間から吾夫に強請つて居たところなんですわ。それぢや寛緩と云ひ度いが、然うもならないのねわ」

「然うよ、ホンの些な間なの、五分間位の」

「おやく、それぢや何から話して好いか、然う時間に制限があつては、氣ばかり急いで仕方が無いわ」

「其の後の夫婦交情は……無論好いのでせうね」

「は、別に變つた事は無いの」

「まアそれが何よりだわ。……お父様は歸られたさうなが、彼の方との折合は如何でした」

「然うね、舅と云ふものはまアあんなものでせうよ。後には然うぢや無かつたけど、初めの内は随分變つたわ」

「後に好かつたら、それも宜いのでせうよ。まア肝腎な夫婦交情が好いことから、それで結構よ。……此の家も一寸氣が利いて居るわね」と氣を替へて室内を見廻しながら、

「は、夫妻丈け居るには宜いよ」

「妾の方よりも餘程閑靜だわねわ」

「は、淋しい位よ。……小川さん、妾が斯うして此方に居るのも、最う五十日ばかりだから一度お別れに何處かへ参りませうね」



「然うだわねね、留別會に三人で、一晚泊りの旅行でもしませうよ。鎌倉か大宮へでもね……」

「稻毛でも宜いわ」

「あッ、それより美津代さん、彼の安東が貴女を捜して来てよ」

「わッ、安東が。……最う出獄のでせうかね」

「一年だッたから然うよ。貴女の許へは来ませんの」

「わ、来ないのよ。如何云て来ました」

「最う全然改悛したから、お詫びに来たッてね、然う云ふのよ。……成程、改悛したかとも思ひますけれど、未だく油断はならないのね」

「それで貴女、妻の許を教へなすッて……」

「如何して教へますものか。妾は其の後知らない云つたらね、誰に聞いたのか何んでも六本木邊に居る筈だと、然う云つて居ましたよ。……だから何日何處を如何して尋ねて来るか分らないわ」

「ちやア油断がならないわねね。其の覺悟をして居ませうよ」

(四十六)

美津代は機を見て良人に安東の事を話に及んだ。すると恒雄は不快の色を顔に浮かべて、

「む、不良青年か、仕方の無い奴だ。そんなのが眞實改悛したなら宜いが、然うで無いと牛蹄に取ッ付かれたやうなものだ。餘程手厳しく行ッ付けて遣らんと駄目だよ。……好矣、私が逢つて遣るから、お前一人の時だつたら相手になるな」

「好う御在ます。お不在に来たら然う云つて遣ります」

茲に夫婦は安東の來るのを願ふ譯でも無いが、多少その來るを心待して居た。

これより先き、夫婦が此處に越して來た當座から、朝夕其の家の附近へ来て、頻りと様子を探つて居る男があつた。近所の者は既にこれを知つて、變な奴だとは思つて居たが、何も頼まれぬのに、滅多な事を喋舌つて、若しや其の者から恨まれでもしては、後難のほども怖ろしいとあつて、誰一人これを告げる者も無かつた。それと同時に夫婦は更に其の事を知らないで居た。



然るに、或時、彼の家主の主婦が話に来て、

「奥様、私方では一寸も存ませんけれど、近所の人が密に知らして呉ましたには近頃此邊へ怪しな男がよくやつて来て迂路々々して居るようですが、何うやらそれは、貴所方お二人に目をつけて居る模様だと云ので御在ますのよ。……宅でもそれを聞きましてね、如何かして見届けて遣りたいと云つて居りますが、それも未だ確乎とした事は分らないのです、けれど若し然うであつた時には油断がなりませんから、貴所方御自身にも十分御要慎なさいましょ」と云ふのである。

「然うで御在ますか。何んだか氣味が悪いですね。……其の男と云ふのは、一体どんな人相でせう」

「何んでも職人が遊人風の、三十前後の者だと云ふ事です。……何かお心當りは御在ませんか」

「いね、少しもありませんわ。だけど、能く聞いて置く必要がありますからとは云ふものゝ先刻から心の中では例の安東を思ひ浮かべて居た。」

「御道理ですわ」

「よく伺つて置かんと、途中で行逢つても知らないで居るやうな、間拔を演りますからね」

「然うですともねね」  
これでは如何やら安東でも無さうだ、其の他には何も思當りが無いので、美津代は然程意にも留めないで居た。

處が、或日の事、夫の歸りが非常に遅いので、美津代は大いに氣を揉んで居ると、其處へ空手の車夫が驅けて来て、

「奥様、お宅の旦那が只今お怪我をなされて、急いで貴女を呼んで來いとの事ですから、お迎へに來ました」と云ふ、それで無くても、今心配の眞最中とて、

「ね、且那が怪我しました。……ど、ど、何處で御在ます」と氣も狂亂

「遂ひ其處です。早く行ってお上なさい」と手を執らないばかりに促し立てる。美津代は其の儘走り出した。

折柄、夕暮の霽が立罩めて、四邊一面薄暗くなつて居る。美津代は行先を透し見たが、それらしいものも無いので、また、  
「何處ですか」と足を緩めて尋ねた。



「早く、そんな事云つてる時ぢや無い。急ぎなせね、停車場ですよ」と後から押すやうにして走る。

「ワッ停車場。……では汽車にでも轢かれましたか……」と更に気が氣でない。

「まア行けば分る」

二人は驅けて深い木立の中に入た。すると、其處の路傍に一輛の腕車が置いて在る。

「さ、これにお乗なさい。幾許近くても女の足では暇取れるから」

美津代は何んだか氣が進まなかつたけれど、早く其の場へ行きたさに、云はるゝ儘に遂ひ乗つた。

(四十七)

美津代が腕車に乗移ると、車夫は直ぐに幌を下し、合羽でもつて前を蔽ふた。雨も降らぬに何んの用ぞ。

「そんな事する間に速く行つたら宜いでせう」

「でも餘り霧が甚いから」と云ひつゝ、鞭棒執つて駈出した。其中に日はだんくゝと闇くなつた。

腕車は變な方向へ換いて行かれる。車中の美津代は暗くはなる、外面が能く見えないので、只だ感ばかり充進らせて居る。最う停車場に着きさうなものだと思つて居るのに、幾許行つても、到着しない。のみか燈光さへ目に入らぬ。稍く變だと氣が付いて、突如車上に延上りさま合羽を引寄せて外方を見ると、腕車は眞暗な森の中を走つて居る。

「車夫さん、何處へ行くの。此處は遠ふぢやないか」と咎めたが、車夫は返事だに爲す、遽かに歩を速めた。

「アレ……、誰か来て下さい」と美津代は覺悟す絶叫した。

すると、車夫は振り返りながら、

「はい喧しい、静かにしねねと命が無わぞ」と脅嚇し付けた。

「でも妾はこんな所へ行くんぢや無い」とオロ／＼聲。

「お前何んと云つたつて仕方が無いや。最う斯うなりや此方のものだ、觀念しろい」と相變らず走りつゝ居る。



美津代は如何かして逃げやうものと、幾度か飛出さうとしたが、車体がグラ／＼して起上る事が出来ない。而も腕車は速力を増して居るので、眼が暈るやう、それを勉めて、今度こそはと母衣を下して起上つた。

「わい、デタバタするな。……やッ、何時の間にか幌を開けやがったな」と衝と立停つた。此の機を外さず、美津代はヒラリと身を躍らして車から飛下り、一目散に森の中へ驅込んだ。

「ナニ、逃げやうたッて逃がすものか」と追蒐けた。如何に一生懸命でも相手は男の面も車夫である。直ぐさま追付いて譯も無く捉へられた。

「最上敵はないと思つたから、もがきながらもまた、

「誰か助けて……」と聲を限りに叫んだ。其の聲は遠く森の彼方にまで響いた。

車夫は急ぎ三尺を引解いて、慥れやグル／＼巻に縛上げ、ついで手拭の猿轡、それを引擔いで投込むやうにして車に乗せ、またも母衣を卸して、今度は綱を掛けて動かぬやうにした。

「これで大丈夫、もう外れつこは無ね」と獨語して驅出した。車上の美津代は口も利けず手も

愛

と

財

(後編) (終)

利かず、足ばかりで跳ねて見たが、其の効は無。もうこれ囊の鼠同然の身となつた。

森を抜けて野原に差蒐らうとすると、俄然、行手に立塞つた大きな黒影がある。車夫が愕いて立止まる途端に、衝と鞭棒を突戻したので、車夫はタジ／＼。だが、弱味を見せじこ。

「已ぬ、何にしやがるんでね」

「何にしやがるとは手前の事だ。車に乗せた女を見せい」

「ナニ、生意氣な」と鞭棒下して打つて蒐る。心得たりと身を交し、脾腹を健か突上げたのでウンと云つて卒倒した。

「は、見掛に似合はぬ弱い奴だな」と云ひつゝ、車の中から女を引下して手拭を取除け、懐中電燈に其の顔を照して、

「や、貴女は美津代さん……僕は安東です。御安心なさい」

(發行者白す。復も可怖悪魔の手に落ちし、可憐美津代は如何になり行くか、乞ふ引續き第三編を讀まれよ。)



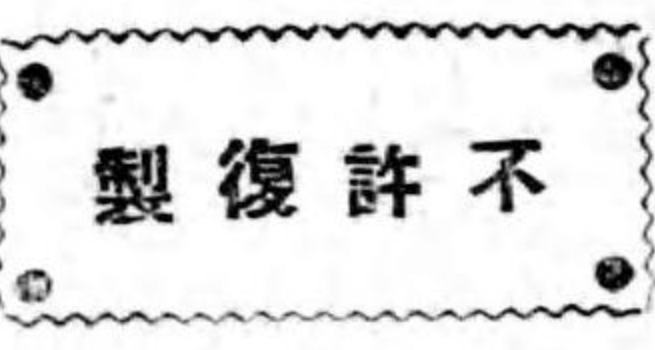
樋口隆文館

營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版に及び其御賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君に及び貸本を營業とせられ諸君は多少に拘らず御注文被下度候  
 △御賣目録御入用の諸君は郵券三錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ  
 △樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず發行致べく候  
 △樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候  
 △樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大坂八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文には瀛車便又は瀛船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

大正二年十二月二十八日印刷  
 大正三年一月一日發行

定價金四十五錢



【附與編後財と愛】

著者 新田 靜 濤

發行者 大坂市南區鰻谷仲之町 二百廿四番屋敷 樋口 源次郎

印刷者 大坂市西區阿波座四番丁 十二番地 福西 松太郎

印刷所 大坂市西區新町北通一丁目 五十番地 河上 貞次郎

發賣元

大坂市南區三休橋 鰻谷南入西側

樋口隆文館

(振替口座大坂八七九七)



276  
348



終

